

昔物語から探る小国町

齋藤 香穂 塚原奈々枝 小川 奈美 渡部 志ノ
渡邊宗一郎 今 真人 鈴木 拓磨 鈴木 拓弥

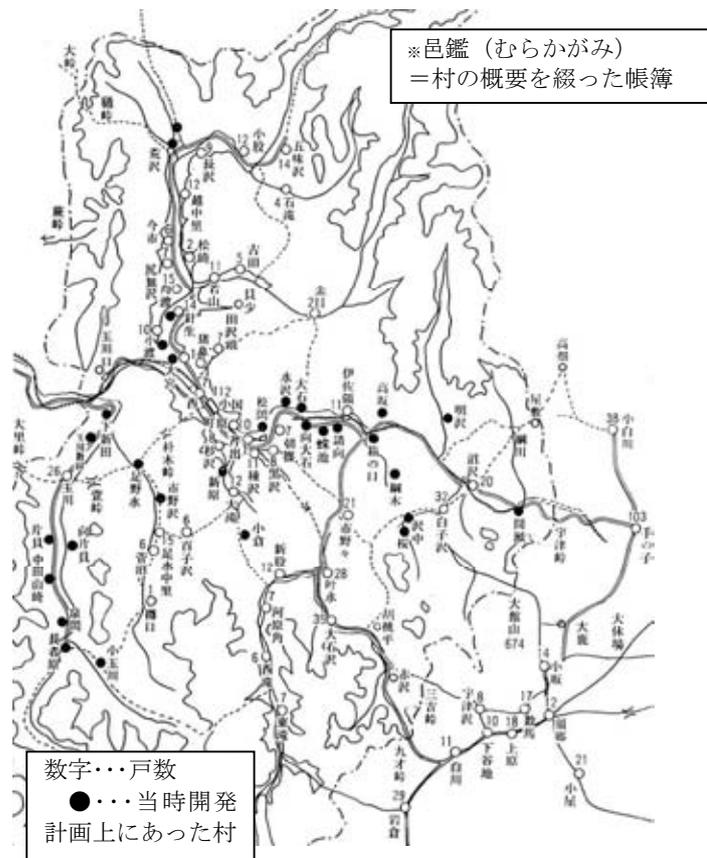
1. テーマ設定の理由

現在の2・3年生は1年生の時に小国町の昔物語をテーマにして各地区（21年度・南部地区 22年度・北部地区）を調べレポートにまとめてきました。それを私たちも受け継ぎ今年度は調査対象地区を町の中心部、小国高校もある本町地区に移し、そこから小国町を持つ歴史を探っていきたいと思いました。そしてまた今回で町全域の聞き取りを完了することになることから、小国町の昔物語を言い伝えとともに綴る「言い伝え集」を作成したいと考えました。

図（上杉領邑鑑にある村・文禄4年）より

2. 調査の概要

- (1) 置賜地区の方言
 - ① 方言を調べる
 - ② 方言の聞き取り
- (2) 昔物語について
 - ① 語りを聞いて
 - ② 昔物語の収集
- (3) 木地師について
 - ① 小国の木地業
 - ② 木流しの文化
 - ③ 木々への思い
 - ④ 木地業のいま
- (4) 言い伝え集作成
 - ① 製本にあたり
 - ② 冊子をつくる



3. 調査の結果

- (1) 置賜地区の方言
 - ① 方言を調べる

私たちは、幼い頃より生活の中で昔物語に触れて育ってきました。しかし話しの内容を正確に覚えている人はいませんでした。そこで町で語り部をされている方に話しを聞くことにしました。語り部さんとは「物語の雰囲気を壊さないように。」また「その時代の背景を感じてもらうために。」との意味から方言（特に今は使われていないようなものまで）を使って話されるということを知りました。合わせて語り部さんの語りが伝える思いや意味を少しでも正確に理解できるように、昔物語がより面白く聞けるようにとの理由も含め、事前に小国町の方言を調べてみることにしました。

- ・ 小国町在住の祖父母や親戚、近所にお住まいの方から生活会話などを参考に方言を探す。
- ・ 地域の他の方にお聞きし、実際の意味が正しく伝わるかを確認する。
- ・ 方言と意味を調べ、あいうえお順に表にする。

② 方言の聞き取り

【あ】			
あおももの	山菜	あつたげ	有る限り
あがっぱら	(赤っ腹) 赤痢	あっちえ	暑い・熱い
あがぐなった	明るくなった、夜明け	あっじさえ	有るそうだ
あがれ	家へ招き入れる	あだまがじ	頭でっかち
あがんな	物の上に乗るな	あだまやみ	心配事
あぎやじ	さけ	あどさま	仏様
あげず	トンボ	あどおい	泣きわめく子供
あぐど	かかと	あなぐら	かまくら
あぐどかけ	じんべ (冬季の藁ぐつ)	あにさ	兄
あぐどなぐりに	すぐに	あにや	兄
あぐ	灰・にがり	あねさ	兄嫁
あぐし	あぐら	あぶね	危ない
あげいしょ	赤衣裳 よそ行きの衣裳	あぼう	争う
あさふあん	朝食	あまごい	甘い
あさんかた	朝方	あさでっかり	朝晴れ
あしたに	そのうちに	あざぐ	漁る
あぢけわい	(味気悪い) 後味が悪い	あめる	薄くなる
あづらえる	注文する	あじつける	思い出す
あつけなえ	あつという間	あぐだい	悪態
あいしよらう	相手にする	あだげる	騒ぐ
あいふあ	相手	あでがう	合わせてみる
あいまち	怪我	あでぎ	炉縁
あお	大きな木槌	あでずっぱ	当て寸法・いいかげんな
あおのけ	仰向け	あでご	よだれかけ
あえま	(会う間) たまに	あだり	その辺
あつか	赤ん坊	あじこど	心配事
あおしし	かもしか	あっちやえげ	あっちへ行け
あおらじ	アオダイショウ・蛇	あっぱぐち	口あけて呆然
あえぶ	歩く	あばとばて	慌てた様子
あえべ・あべ	一緒に行こう	あげつぼ	雪解けの水路口
あおば	野菜・木の葉	あらぎこぎ	がむしゃらな男
あおらあおら	元気がない様子	あんて	のんき
あごみち	吹雪の雪道	あんばえみ	味見

【い】		【え】	
いあん	案配がよい	えじる	もてあそぶ
いいばぐだ	言いそびれた	えづい	目がちかちかする
いがっだ	よかった	えっきになる	得意になる
いぐずかだる	文句をいう	えであったべが	ご在宅でしょうか
いぐずわい	調子が悪い	えなげだ	へんなこと
いどまごい	おいとまの挨拶	えらんねべっちえ	居られないでしょう
いじくされ	意地悪な人	えびづたがり	ひねくれもの
いさばや	魚や干物の行商	えごで	いいですよ
いじがいに	いっぺんに	えんげ	向こうへ行って
いしゃ	おまえ	えんまに	あとに
いしょうり	呉服屋	えんばいごぎ	ご機嫌とり
いだましい	惜しい	【お】	
いづら	いつもの顔つき	おがる	成長する
いだば	やっていたら	おがだ	奥さん
いなばじまい	稲収穫終わり	おぎつが	起きようか
いまっと	もっと	おしよる	折る
いまちと	もう少し	おしょうしな	ありがとう
いっきび	いい気味	おだじ	もう一膳差し出す
いって	痛い	おだもじかしえる	おだてる
いっぺ	たくさん	おっかね	怖い
【う】		おどっこ	男の子
うだる	紛失する	おどでな	一昨日
うがえる	水がいっぱいになる	おながに	共有して使う
うまがんべ	おいしいでしょう	おなんこ	女の子
うむ	熟す	おもっしえ	面白い
うむれる	蒸し蒸しする	おそ	動物捕獲の仕掛け
うらえだ	天井	おにへえたげる	大人気ない
【え】		おやげね	情けない
え	家	おらえ	自宅
えがろえ	いがらっぽい	おっかえし煮	雑多煮
ええだい	絶対	おぼご	赤ん坊
ええそら	いい状況	おらだ	俺たち
ええがった	よかった	おんつあれる	叱られる

【か】		【き】	
かえし	糞	きおう	はしゃぐ
かえっちゃ	服の裏返し	きかずやろ	無鉄砲な人
がおる	弱弱しくなる	きびわい	不気味
かがっぼい	眩しい	ぎごちねえ	しっくりこない
がぎこ	いたずらっ子	きめる	すねる
がすもぐ	ごみ	きもむ	焦る
がってもね	つまらない	きちろ	来なさい
かだっぼ	片方	きずい	刺激が強い
かだらせ	靴の左右履き違い	きつつえ	窮屈
かづねる	肩にかつぐ	ぎつつりした	満腹などで身動きできず
がっでしね	弱音を吐かない	ぎっちょ	左利き
かもな	構うな	きびえごど	いい気味
がさ	量	ぎす	キリギリス
かっぼごす	壊す。分解する	きどい	フキノトウ等の味を表す
がっでもねえ	ナンセンス	きんびづ	高価な木製の道具箱
がめる	こっそりかすめ取る	きんにやわね	気に入らない
がめづい	けちんぼ	きんか	耳が聞こえない
かぶだれくう	川に落ち衣類を濡らす	きんな	昨日
かもな	構うな	【く】	
がながぐ	面倒をみる。介護する	くいだぢ	食後すぐ仕事をする
がいろぺ	おたまじゃくし	くたまにしね	苦しめない
かなしえがり	不精	くたびっちゃ	疲れた
かどい	機敏・敏速	くわる	埋もれる
かなえじゅう	家族全員	くったぎる	かみつく
がげすぼ	雪屁	くど	焚き口
かまこ	やかん	くべる	焚火に木を追加する
かます	かき回す	くらつける	殴る
かめ	肝臓	くらんげ	回転・逆さま
かngo	桑の実	くらそま	暗がり
かんづける	責任転嫁する	くろ	田んぼの畦
かんじる	冷え込む	ぐんぐど	気を揉ませる
かんにえ	食べれない	けぶたい	煙っぼい
がngoら	空洞	げんどくさい	胡散臭い

【こ】		【し】	
こいしょいかご	背負い籠	しゃえっこ	おせっかい
こしゃう	作る	しゃなる	大きな声で呼ぶ
こがえに	こんなに	しゃっぼ	頭にかぶる物
ごだみごり	濁流	じゃみる	だだこねる
こちよくったい	くすぐったい	じよさね	容易
こっぴどぐ	大変ひどく	しょだれ	よだれかけ
こわええ	疲れた	しょうしい	恥ずかしい
こずげな	こんなもの（蔑視）	しきたれ	臆病者
ごっしゃぐ	怒る	しんぼれ	枝の末端
こっぺ	余計な口出し	【す】	
こっばやぐ	朝早く	ずほこく	嘘をつく
このげ	眉毛	ずべら	でたらめ
こだえる	耐える	ずぐなし	不器用
こんげに	こんなに	すっこかぶり	頬被り
こればり	これっぽっち（少量）	すこだま	いっぱい
こんげに	こんなに（多量）	すっかい	すっぱい
こんびん	あたま	するすびき	糶摺り（農作業）
こげだ	凍みる	ずんぼげる	落水し腰下が濡れる
こんもりこ	子守り	【せ】	
【さ】		せつけなもの	そんなもの（卑下）
さすけね	かまいませんよ	せんどな	この前
さっけな	先ほど	【そ】	
さんびん	からかった子の呼び方	そばえる	甘える
ざんま	様子	そらね	甲斐がない
【し】		そらほど	そんなに
しゃえっこ	世話焼き	そんげなもの	つまないもの
しくれんじ	傷物	そねむ	うらやましがる
しっきたれ	根性なし	そだす	損傷する
しったぎ	唾	そんびん	ひねくれ者
しな	死米	【た】	
しゃっぺ	おませな	だいきり	全く
しゃます	もてあます	だいもじ	建築用の木を山から運ぶ
しやぎはる	迷惑なお調子者	たがぐ	持つ

	【た】		【の】
だで	うっかしい、嫌	のんべに	度々
だっか	段		【は】
たがじょう	地下足袋	はぎる	仲間に入れない
だみ	葬式	ばっこ	糞
	【て】	ばぐさる	何もせず漠然としている
てごご	補助する	はらくっちえ	満腹
でっこに	最初に	ばんきり	いつでも
てまだれ	手間つぶし		【ひ】
でほだれ	でたらめ	ひしゃみづける	はたきつける
てんぼ	嘘	びじゃ	水溜り
	【と】	びったらごい	平べったい
とぎな	たわし	びっじゅぐだがり	臆病者
どごさが	不明な場所	ひして	一日中
とっかばす	取り返す	ひっこじる	捻挫
とつき	慌てる	ひよえら	不意に
どだっばい	不恰好で暖を取る		【ふ】
とっばじげ	手違い	ぶさだ	粗末
どふら	雪の落とし穴	ぶつつぐ	倒れ着く
とるぺづ	だらだらといつまでも	ぶっちげたっちげ	互い違いに
	【な】	ふんごぐる	蹴る
ながまる	長々と寝る	ぶんむぐる	まくり転がす、こぼす
なじょだ	どうですか	ふんぬげ	まぬけ
なしてや	どうして		【へ】
	【に】	へずる	斜面を水平に移動する
にしゃ	お前さん	へんくさ	カメムシ
にげ	苦い		【ほ】
	【ぬ】	ほだ	そうだ
ぬれびっちょ	ずぶ濡れ	ほだわら	雪原
	【ね】	ほえど	物乞い
ねくたれ	ばかげたこと	ほごる	遊び騒ぐ
ねそける	寝そびれる	ほだら	そうしたら
ねっちょ	凝り性	ほだそ	本当だよ
ねぶかき	居眠り	ほして	そして

【ほ】		【よ】	
ぼっこす	破壊する	よぐたがり	欲張り
ほろける	ボケる	よござった	よくいらっしやいました
ほろぐ	叩く	よわり	夜勤
ほまじ	へそくり	【わ】	
ぼいだす	追い出す	わっさする	いたずらにいじる
ぼんこ	背中を丸める	わらわら	大急ぎで
【ま】		【ん】	
まえす	ごまをする	んめ	うまい
まきこき	一生懸命	んだ	そうだ
ままなぐ	どもる	んだばよ	それならば
まよう	弁償する	んだら	それでは
まるぬげ	そっくりそのまま	んでね	そうじゃない
まっと	もっと	んだがした	そうかなあ
【む】		はじめ小国町の方言と限定していましたが、その検証が難しく、置賜地区という枠での調査となりました。年の離れているご年配の方を中心に聞きしたので、はじめ自分たちはあまり分からないかもしれないという不安があったのですが、話している内に「それ方言だよ」などと指摘され、普段意識せずに使っている言葉がいくつもあり、あまりにも生活に溶け込んでいることに驚きました。	
むさずる	いたずらする		
むじる	曲がる		
むじれる	人見知りする		
むぐす	失禁する		
むごさえ	健気に、可哀想に		
めめず	みみず		
めねぐした	おねしょした		
【も】		とくに「ん」で始まること言葉がいくつもあることに興味を持ちました。そして、場所や仕草など細かい条件のもとで限定されて使う珍しい言葉もあり、それは、自分の思いをより正確に伝えようとする気持ちからできた言葉ではないかと考えました。小国町は山間部ということもあり山菜が豊富です。夏はワラビが育ち、秋にはキノコを収穫できます。そのせいか山（天気）に関するものや食に関する言葉が多いように感じました。ある言葉の代わりになるだけではなく、その状態と状態の中間といった意味合いを指すような方言も存在し、奥深さを知ることができました。	
もうまい	気が動転する		
もつける	物が倒れる		
もぞかだる	意味不明な事を話す		
もごせ	健気に、可哀想に		
もんぼれる	痴呆症になる		
【や】			
やいぐりむごう	ずいぶんと遠く		
やんだ	嫌だ		
【ゆ】			
ゆつつばぐ	結いつける		
【よ】			
よっぴで	夜通し		

(2) 昔物語について

① 語りを聞いて

- ・ 後藤弘子氏（小国町の語り部さん）

「語り」を披露していただく前に、後藤さんにお話をお聞きしました。

大人が話す昔物語は当時の娯楽でもあり、囲炉裏を囲み語らうなど家族の団らんや子どもへのしつけや教育でもありました。あらゆる口こみで各地区に広がり、地元で馴染むように変えられた物もあつたりして、後藤さんでも純粋な小国町の昔物語を探すのは難しいそうです。

小国町の昔物語の中からお話をいくつか選んで「語り」を披露していただきました。

「だいてんばこ」の石	話し 後藤弘子さん
<p>昔あったけど</p> <p>あるお寺の近くに大きな大きな沢が流れていた。川まで大きくないから、沢なんだ。すこーし小さいですけども、それでも普通の沢としては大きい方。そこに木の橋が架かっていて、橋のたもとでね、しくしくしく泣いている女の人がいたんですって。</p> <p>「はあ、なんで泣いているんでしょう」とそのお坊さんが聞いたんだって</p> <p>「あなたは どうしてここで泣いているんですか」って、</p> <p>「私は旅をしてここまで参りました。この沢を渡って向こう岸に行きたいんだけど、とてもこの細い橋を渡ることが、私にはできない」ってさてどうしよう。この女の人は橋を渡ってどうしても向こうへ行かなくてはいけない、自分は渡してあげたいけれども修業の身ですから、お坊さんは昔は女性と手を触れたり、それから女の人をおんぶして向こう岸に渡すなんて事はとてもできない。そこでよく考えました。自分はいろんな所を回って歩いてきました。そしてその場所場所でみんなに世の中のいろいろなことを説教しては悩みを解決してまいりました。そして今、向こう岸にどうしても行かなくてはならないという女の人がここにいる。</p> <p>「自分はこの女の人を助けるっていうことが使命だ。」と、この修業僧は衣に女の人をすっきりと包んで、そして自分で背負って渡してあげました。すると女の方は</p> <p>「ここから、今来た道に戻らなければいけないと思っていました。本当にありがとうございました。」とお坊さんにお礼を言いました。</p> <p>お坊さんは、「自分は本当はそういう事をしてはいけなかったんだけど、人の悩んでいること、助けてあげることが自分の使命だと思って。」と告げ、女の人と別れました。</p> <p>あの方はとても綺麗な人であった。また心の優しい人であろうと思いました。それからというもの、修行をしていてもずっとその女の人を考えるようになっていました。</p>	

「今、あの女の人はどこへ居るんでしょうか」「今どうしているんでしょうか」とだいてんばこと言う場所に来ては毎日悩んでいたそうです。それはもう来る日も来る日もずっとですよ。

そうして悩みつづけていたら、ついにお坊さんの思いが石になってしまったんですって。お坊さんは石の神様になってしまったんだとさ。

トンピンカラリン虫くった。



語り部さんが話す「語り」は物語を想像させる力がありました。

小豆婆さ（あずきばばさ）

話し 後藤弘子さん

昔あったけど。

北国の折戸っていうところに私はずっと木々掃いていて、そしてそこに、そこから三面（みおもて）っていうとこさ通じる道あったんだ。そのの途中に、朴ノ木（ほおぬき）沢っていう沢あって、その沢の辺りは、おっきい木があるからいつ行ってもうす暗くて、日が照ってても暗い不気味なとんだ。したら、あるとき村の人たちが

「なんだかこの頃よお変な噂聞いたども、おめえ聞かねが」ってこういうんだ

「いろんな噂だ」っていう「あのよ、朴ノ木沢の辺りさ行くどよ

「うち米あるとも小豆ねえ」っていう声聞こえるんだぜえって言うんだとさ

「うち米あるとも小豆ねえ、小豆くれえ」って言うんだとさ。そういう声が一と聞こえてくるんだとさ、そしたら

「いやあ、おらも聞いてらった」「おらも聞いてらった」そんな噂がずっといっぱい広まったなかで、子どもたちが夕方暗くなるまで遊んでいると

「小豆とぎ（研ぎ）ばばさ、くっぞ（来るぞ）」っていうと皆、家の中さ入んなんだけ。

そんなことをしていたある日、旅人がずっとその道来たんだだけ、そうしたら、朴ノ木沢とこさ来たたら、沢のところに小豆がぼろぼろ落ちてくるので不思議だなと思ったど。

なんでこんなとさ小豆あるんだべなと思っていたら、小豆がひゆるひゆると、動くなんだとさ、そしたらするすると動くもんだから、旅人はその小豆を追っかけて行ったら、草の中に入っていた。変に思って覗くと、ちょうど入っていったところに石像があった。気持ち悪いと思い、くるっと後ろ向きになって逃げたら、小豆が旅人を追いかけて、するすると来るんだとさ。

旅人がはっと後ろを振り向くと、ピタッととまるんだと。いやあ、おっかねおっかね、どっか隠れっとこねえかなんかと思っていると、ちょうどそこさ、小屋こやっこがあったんだだけ、その小屋っこさ、たたたっと入っていったど。

ピタッと戸を閉めて、そこさ隠れたっけ、すると、ガタガタガタっガタガタガタっとならぬ音するんだとき。いやあおっかねなと思ってたっけ、そのうちにピタッと音がしなくなった。

あれ、小豆いねくなかったかな？と思って、そうして旅人が、戸を少し開けたら、小さい小屋の周りさ、ピカピカピカピカピカピカっとならぬ、いっぱい小豆が光るんだ。

いやあ、おっかねえと、また戸をばたっとならぬと、小豆とぎばばさの音が聞こえてきたんだ「小豆とごおか米とごおか、それとも蛇を出す気にしどころか」っていう。

さあ、おっかないおっかないって思っていたら、また、戸がガタガタっとならぬかと思ったら旅の人を小豆とぎばばさが食べてしまった。食べらっとならぬことはつまり殺されてしまった。ってことだな。そんな話がギョッと噂になっていたんだ。そしていたらそんな噂があっとならぬ、そこは「誰も通りたぐねえなあ」とみんなが思っていた。

ある時、折戸の若い人一人、母親と若い人二人暮らしだっとならぬ、若い人に、母ちゃんが、

「ごめんよ、西表さ小豆届けねばなんねなんよ、西表さ小豆届けねばなんねから、お前まず、あずきとどてきてくんねが。」って頼んだ。そうしたら若い人が

「困ったなあ」と思ったども

「やんだ」っていつてらんにならぬ、母ちゃんのために「やんだ」って言わんねがら行かねばなんねなあと思っとならぬ、そして

「じゃあ、母ちゃん、いつてくつがあ」っていつて、小豆しよっとならぬ、暗ぐなんねうちに早く来るようにと思っとならぬ、どんどんどんどん行っとならぬ。

ちょうど、朴ノ木沢の近くさいっぱ、ついにあの音が聞こえてきた

「道の木とごうか小豆とごうか小豆まえー、小豆くれー」って。

その音が本当に聞こえてきたと知っとならぬ

「ああっ、聞こえてきた」と思っとならぬ

「おっかね」

その若い人は村一番の臆病者の若い人じゃったけど、そうしたら小豆をぽーんとそさ投げて、どんどんどんどんと、家の方さ走っとならぬ帰っとならぬ来た。そして折戸の人たちさ、みんなさ

「あの噂はほんとだ、今、俺聞いてきたもの」といつた。

次の日、折戸の人みんな総出で行っとならぬ、朴ノ木沢の所で、その若い人が投げた小豆は、ひとつ粒もなかつた。あつたのは、豆を入れていた袋だけが、ぽかーっとならぬ口をあけて、あつたっけどそれからいつなもの、小豆とぎばばさがどっかにいつから

「夜は早く寝て、夕方はいつまでも外にいらんねぞ」

と折戸の子どもたちにいつて聞かせたとき

トンピンカラリン虫くつた。

子どもに添い寝して子守唄のようにいつて聞かせる場合、子どもが寝たと思ったらまだ寝ていない。するとその物語の続きを新たにつくっとならぬ話す。といつたような事を繰り返すうちに長い長い終わりの無い話になっとならぬいつたり、またそこから別の昔物語に発展していつていくこともあるそう。

② 昔物語の収集

次に小国にまつわる昔物語を探すことにしました。しかし本町地区は核家族が多く、話を聞いていそうなおじいさんやおばあさんを探すことができませんでした。そこで私たちが通っている高校に伝わる話を足がかりに調べていくことにしました。長くいらっしゃる先生に聞きました。

釜場について

現在の小国高等学校附近は「釜場」といわれているようですが、この由来について次のようにいわれています。

現在東山段丘という洪積世時代に形成された段丘が小国町の東にあります。この段丘のところを東から西へ流れる大沢川という小さな川があります。この大沢川は現在、(株)コバレント・マテリアル（小国町一の企業 旧東芝電興）附近を流れていますが、昔は東の方から北の方に流れて、今の小国高等学校のグラウンドあたりを流れて、横川に合流していたということです。

というのは、高等学校を建てる際、整地をしてみるとある幅で東から北の方へジャリ石や大きな石が無数に出て来たといわれています。そこは非常に水がわきやすく、昔の大沢川はここを流れていたようです。そして、この附近に住んだ人々は、この釜場といわれた地域で共同生活を営み、そこで生活のための物の煮炊きをやっていたのではないかとわれております。小国高等学校を建てる時、そのジャリ石の聞から昔の人々が使用したと思われる「石うす」や生活に使った石鍬や石斧なども多数出てきたそうです。このようなことから「釜場」と呼ばれるようになったのだと伝えられています。

お話を聞いてびっくりしたと同時に人に話したくなる事でした。班員の1人はその晩、家に帰って両親に話したそうです。しかし「お前知らなかったのか」と言われたそうです。親も卒業生なので知っているもおかしくはないのですが、ちょっと悔しい思いをしたと言っていました。

ひょうろう淵

現在私たちの通っている小国高校の近くを流れる横川の上流に「ひょうろう淵」と呼ばれる、とても深い淵があります。これはそのひょうろう淵に伝わる話です。

昔から、ひょうろう淵は非常に深く、川が急に曲屈するため一流から流れて来た水や瓦礫がこの淵に強くあたって年々少しつつ淵を削り取っていくのでした。

しかし昭和の初め頃（昭和二・三年ごろ）小国地域は平年とはちがった大雨が何日も続いて、人々をたいへん苦しめたことがありました。横川は、毎日少しずつ水かさを増し、ひょうろう淵にあたる荒波はだんだん強くなって表面の岩がくずれました。

そんなある日、村人の一人が偶然ひょうろう淵を通りかかったとき岩の中に人間の顔をみつけました。恐怖のあまり足が立ちすくんでしまいました。しばらくして我にかえった村人は、青くなって大急ぎで村に帰り村の衆に知らせ、若衆が総出でひょうろう淵に駆けつけました。

そしてよく見てみるとそれは人の顔ではなく粘土で作られた仏様の顔でした。最初に見つけた村人は、憶病だったので人間の間違えたのでした。若衆たちは、それを取り出して静かに洗いました。すると仏様は、だんだん崩れてしまっって一個の粘土の固りでしかなくなりました。

小国町の河川はどれも水量のある大きな川です。その為、昔から川の事故が多かったのでしょうか。子どもだけで行って遊んではいけない所、特に川や沼等に関する怖い話は多く存在します。

二ノ宮ヶ原

現在の小国中学校（小国高校と道路をはさんですぐの近くにありす。）がある一帯より横川にかけて、この附近を昔から人々は「二ノ宮ヶ原」と呼んでいたそうです。

この「二ノ宮ヶ原」についてこんな事が伝えられています。二ノ宮神社とは、昔、武士たちが戦争をやって勝つと、その戦勝祈願として自分達の神様を祭ったものであるといわれております。そして二ノ宮神社が今の中学校のところに祭られていたと伝えられています。二ノ宮神社の本家として一ノ宮神社があります。それが一部の人々は、現在北部にある有名な「大宮神社」であったと言う人々もいます。

大宮神社は昨年のレポートで触れた「大宮子易神社」のことで現在は子易神社としての方が有名になっており、二ノ宮神社の本家であるかどうかわかりません。二ノ宮神社があったと伝えられている現在の中学校附近一帯には、神社の土台さえ残っていませんが、当時の小国町は今、城山（県社山と呼ばれている場所）といわれている所に城があつて、この小さな町である小国を守り、そして町の中心に今の緑町附近（現在の小国町では商店街や住宅で賑わっている地域）で「古町」として栄えていたと言われていす。

この古町といわれた緑町一帯を戦後区の整理中に、昔の人々が使用したと言われるものが多数でてきたそうです。以上の事から考えると小国中学校を中心に昔は町が栄えていたそうです。

二ノ宮神社は毎年子ども神輿も出る、町の大きなお祭りがあります。昔も今に負けず盛り上がっていたことでしょう。小国町は少子化に伴い現在ある小学校・中学校をそれぞれ1校にする計画があります。26年には今の小国中学校の側に小学校を新設し開校するそうです。すると町の小中学生全員が集まることになり、隣接する小国高校と合わせ学校地区になります。そこでこの話のように賑やかさが戻ればいいと思いました。次に、班の一人に農家を営んでいる家庭がありその家族から聞いた話です。

農夫と熊

ナデとは雪がこけた（解け崩れた）ことをいいます。春先は樹木や岩石を打ちくだくこともあるほど強力なものだそうです。昔、二月末に小国の百姓が山道を通る時このナデに逢った。彼は谷底に落ちて、気がつく穴の中に入っていた。そつと腹ばいになって出ようとすると、何やら毛のようなものに触れた。これは熊だなと思うと背筋が寒くなった。そしてまた気を失ってしまった。その男がまた目を覚まして穴から出て三月。家の者は大喜び、男が熊に助けられたことが評判になっていた。ある人は「せつかくの熊狩りもしなかったのか。」と残念な口振りで、ぜひつれて行って来れと言うので、その男を案内して行くと、熊は難なくつかまった。ところがその肉を食べたものは腹痛となり、その百姓は数日後死んでしまった。その後も後を追うかのように一人また一人と死んでしまい、その家はつぶれてしまったそうです。

近年、熊の被害をよく聞きます。小国でも農作物を荒らされる。など苦情が多いようです。しかし地元の人に聞くと、熊は本来臆病な生き物で山に食べ物さえあれば危険を冒してまで出てこない。といひます。山中で自由に生きていた野性動物の行動範囲を縮小させたのは紛れもなく人間です。人間が理想の生活を求めてきた結果、動物達にしわ寄せがいつているということも忘れてはいけないと思ひました。

百石山

小国町伊佐領集落の北東に「百石山」という山があります。

昔この山の頂上の大きな木の上に「大わし」が巣を作っていました。

この「大わし」は、時々山の下にある伊佐領集落や高坂、網木、箱ノロ集落に、舞いおりてきては、家畜を食い殺したり、人々におそいかかったりして、人畜に数えきれないほどの危害を加えていました。

この「大わし」が飛んでくると子供達は家に隠れ、震えあがる始末でした。集落でも何度となくこの「大わし」について相談をしましたが、だれ一人として自分の命をすててまで大わしを退治しようとする者はいませんでした。

この苦しみを耳にしたこの地を治めている殿様は、

「この大わしをただちに射ち落すように。」というおふれを出しました。

しかし「何といわれても自分の命が一番大切だ。」と村人たちは大わしを恐れ、射ち落す者はいませんでした。

それを耳にした殿様は、

「そんなあぶない仕事を村人達がしたがらないのは当然だろう。」といいながらも、

「このままでは大変なことになる。大わしが2匹、3匹となったらどうなる事だろう。」

と話し合いました。

その結果、集落や村人を救うためには、しかたがあるまいと。

「集落を騒がす大わしを射ち落した者には、知行百石を与えるぞ、誰かいないか。」

という異例のおふれを出しました。これを見たある集落の若者は、

「百石も、貰えるならば命をかけてやってもやりがいがある。」

と大わしを射ち落す決心をしました。

どうしたら大わしを射ち落せるかと若者は、その方法を一晚中考えました。

そしてある日のこと、夜のうちから大わしの巣の下にこっそり忍び込み、夜明けに巣から大わしが飛つた時を狙い、射ち落そうとしました。

著者は夜になるとこっそり山に登りました。そして大わしの巣の下でじっと夜の明けるのを待っていました。まわりの山がうっすらと明るくなり始めたころ突然「バタバタ」という大きな羽の羽ばたきとともに、今まで人や家畜に危害を加えてきた、あの大わしが巣から飛びたちました。それと同時に、昨夜からじっとかまえていた若者は「今だ！」とばかり手にした鉄砲の引き金を力いっぱい引きました。「ダーン」

うっすらと明るくなった山々に鉄砲の音が響き渡りました。同時に大わしはバツタリと地上に落ちました。そして若者は、その大わしの死がい背負って喜びいっぱい山を下りました。

それ以来、伊佐領を始めとした箱ノロ、高坂、網木等の多くの集落は、この大わしの危害から救われたといわれています。

大わしを射ち落した勇敢な若者は、その手柄により知行百石を、受け賜ったといわれています。

そのことがあってから、この若者をたたえると同時に約束通り百石をくれた殿様を永久にたたえようとして、伊佐領の集落の人々は北東にある大わしが住んだ山を「百石山」と呼ぶようになったといわれています。

学校の近くには祠や古い地蔵様なども多数あることに気がつきました。

そんな、神社など宗教的な部分などから調べてみました

雨降り地蔵

雨降り地蔵と呼ばれる地蔵様が今でも足野水にあります。この地蔵様は、何か地蔵様のうんと嫌がることをすると雨が降るといふ言い伝えがあります。

そこで、ある雨のほとんど降らない年、この話を伝え聞いた離れた集落の若い衆がやってきてどうかこの地蔵様を貸してくれ、と言って持って行ったのです。

自分達の集落まで借りてきたものの、地蔵様の嫌がることなどというのは誰も知らないで、とんと因ってしまいました。

地蔵様の頭をごつんごつんとたたいてみたものの、地蔵様は怒ったり嫌がったりなどしません。そこで、一人の若い衆が、自分のしめていた6尺ふんどしをばらばら解いて、それを地蔵様の足にしっかりとゆわえつけ、ぐいっと逆さに吊るしてしまったのです。

さすがの地蔵様も、これには少々嫌がったのか、空には雲がわき出し、ポツリポツリと雨が降りはじめました、おかげでその集落の田畑は難をまぬかれたということです。そしてこの地蔵様は、実は佐藤次右エ門信清の子孫で益運という人の魂がはいっているのだということです。

益運は非常に人柄が優れ、どんなことがあっても絶対に腹をたてたり、嫌な顔をしたりなどする人ではありませんでした。その人徳を高く評価され、後に仏道に入ってから光学寺17代目の和尚になったということです。

また、その益運の分身として故郷足野水に奉られたのが、この雨降り地蔵だということです。

極楽寺の話

小倉集落から2キロ程山奥に入ると、極楽という家がありました。この家は、正徳時代に菅野峠という所から移ってきたといわれています。以前この家から少し下った所に極楽寺というお寺があり、この寺には何度住職が入っても、入ったきりで出てきた者は誰一人としていませんでした。そのため、村の人からこの寺は不思議な寺と言われ、怪しまれてきました。

そんなある日、一人の若いお坊さんが住職としてこのお寺の中に入りました。その夜小倉の若者がふとした興味心にそそられ、その寺に入りこみました。

そこで若者の見たものは、お坊さんが丁寧に頭を剃っている姿でした。何をするのかとしばらく立たずんでいるとお坊さんの後に、今にも飲みこもうとするばかりに大きな口を開いた大蛇がいました。

これを見た若者は、血の気を失って2キロもある自分の集落に帰り、今までの出来事を一部始終話し、気を失ってしまいました。これを聞いた村人は、驚いてすぐさま鉄の矢やたばこの脂（やに）を手に持ち、大蛇退治に駆けつけました。しかし、駆けつけた時には大蛇もお坊さんもいませんでした。あるのはお坊さんの道具だけでした。

それから極楽寺には、誰も入る人がなくなったといわれています。

今は、その土台石だけが昔の面影を残しています。

小国町から4キロの所に大滝という集落があります。村の中心部には高さ10メートルの大きな滝が四季をいりどり、この滝がこの村を代表するものとして「大滝集落」と言われるようになりました。そして現在も集落の中心部にはあまり大きな滝とはいえないまでも、昔から言い伝えられてきた滝があるそうです。滝を境にして、滝の向い側を「滝の向い」と呼び、そばには「不動」「古志王」「山の神」の神社が奉られています。ご不動様は滝の上に奉られています。その回りにある大小さまざまな杉の木は直径1メートルもあり三百年以上は経っているそうです。ご身体はここにはないが不動様の説によると、頭の毛はちぢれていて、右にたれ7つに分けられて結んであり蓮華座というハスを頭にあげ、迷いくるしみ、悟りの世界をさまようと言いつたえられています。そして左手に縛の縄をとり右手に降魔の剣を持ち、背に火炎を覆い、悪魔や煩悩を追い払うといわれています。昔はえびを神に供えたらしいのですが、それはえびのように腰がまがってもまだまだ働けるようにということからだそうです。また、この神様は、火の神様ともいわれています。調べた結果、滝の上にあることが全国的にも火の神様として共通しているそうです。

鱒の王様

蝶池の速から少し上った山麓に地元の人はずつみと呼ぶ灌漑用水池があります。この池は水量の豊かな泉を水源にもっています。

昔からここに鱒の王様が棲んでいて、その池は底なしであるといわれていました。鱒の王様は鮭ほどの大きさで、家来を引きつれ水面近くを遊泳することがあり、もしこの光景を見た者がいれば三年以内に死ぬといわれています。鱒の王様が棲んでいるので、古来よりこの池の水は涸れることがなく、万が一若い人が水を干す様なことをすると、王様は水を求めて、必ず大雨を降らせて水量を確保するそうである。この池の所有者であり、田んぼの水源をここに求めている高橋平兵家では、日照りが続いて困る時には池の水を人工的に干して降雨を得ていたそうである。

御行塚

大石沢に御行塚という塚がありました。その上には崩壊した砂岩の朽ち果てた石碑が立っており、そこにはかろうじて享保との年号が読むことができるそうです。

昔、何処からか一人の御行者が来て、大石沢の下駄屋（今は亡びたそうです）に留り、二百年、又は三百年後経ったら掘様にといい、その土中に生きてまま埋ったそうです。大石の渡辺善九郎家では今もこれを奉っているそうです。

市野々村の鬼

小国の市野々村に老婆が貧しい家に住み、孫を養っていました。あるとき異変が起きました。なんと大きな角が一本右の額に生えたのです。心配した子供らが角を切ると、次には左の額に角が生えてきました。その夜今度はこれを切り取ったのですが、老婆はそのまま忽然と姿を消してしまいました。翌年村人が朝日山に登ったとき、一本の角がある老婆に会いました。それは飛鳥のように白髪をふりみだしている鬼老婆の姿でありました。天保七年の話と伝えられています。

杉沢の不動様

現在小国町杉沢集落の北側に「滝のいり」という場所があります。そこに不動滝という滝があり、昔その近くに不動様が奉られていました。

昔この神様の本尊が春さきの雪解けの大水のため流されてしまいました。村の人々は、この事に気づいてはいましたが、だれ一人として建て直そうとする者はあらわれませんでした。

それから2・3年過ぎた、ある年のことです。村に突然、得体の知れない病気がはやりだしました。村の人々は最初はくせの悪い風邪でもあろうと思っていました。ところが、その悪い病気が集落中に広まり、また大変くせの悪いのには集落の人々は、気持ちが悪くなってきました。村のお年寄り達は「これは何かの祟りにちがいねえ。」「何かの罰にちがいねえ。」とか「どっかの神様が怒っているにちがいねえ。」などと話をするようになっていきました。そんな中で不安な生活をしているある日、村のひとりがこんな話を持ち出しました。

「いつまでもこんなことが続いたら大変なことになる。今のうちに何とかしなければ。」そんな話が村人全体の声となり、ついにはみんなで話し合うことになりました。長い相談の結果、集落の物知りが提案しました。それは「神つき」をやろうということです。

(神つきとは、心の正しい人1人神様の前に置き、神主を先頭にみんなでご祈祷する事で神様がその人にのり移り、その人の姿をかりて自分の思っている事を話し、そしてこの場合その人が足を曲げたままピョコンと一尺ぐらいとび上がると神がついたのだといわれているそうです。)

神様の前でご祈祷されていた男がピョコンと飛び上がりました。神がその男に憑いたことで、村人は喜びいさんで

「神様は、何んとおっしゃいましたか。」と聞きました。

するとその男は、いかにも自分が、神様の口調で得意げになって、

「俺はこの集落の近くに住む神様だ。おまえたちに呼ばれたから今ここに来た。」

といいました。そして

「村に悪病が流行っているのは、数年前に山にある不動様が流されたからだ。村の人々がそのことを知っていながら、誰一人として、建て直さなかったからだ。このままにしておくならば、今後ますます病気は広がり、村には悪いことが重なるであろう。」と言いました。

それを言い終わると神の、のり移った男は、そのまま深い眠に入ってしまった。男が眠りから覚めてから、村の人々が自分のまわりで、落ち着きなく騒いでいるのを見て不思議にたずねました。村の人々は、今お前がこうこう、こう言ったのでどうするかみんなで騒いでいるのだと教えました。するとその男はびっくりして、

「自分は、そんなこと少しも覚えていない。」

「ああ恐ろしや。」

と震えていました。それを見ていた村の人々はこれはやっぱり神様の言葉にまちがいないとばかりに次の日、村の人々は朝早くから数年前流された御本尊を探しました。

一生懸命みんなで探した結果、雪解けで流された御本尊は川の下の方の淵（現在不動様が奉られている所）で見つかりました。村の人々は喜んでその本尊を入れるお堂を建てて、奉ったといわれています。

それが現在の杉沢の不動様だと言い伝えられています。

かやのみの伊勢参り

黒沢集落のはずれに「かやのみ」という木があります。まだ交通機関が発達していない昔、いつもなら色づく春の季節ふしぎなことに木々の葉は茶色になっていて、いっこうに色づく気配がありませんでした。村の人々は不思議に思っていました。後になってやっと色づきはじめました。やがてその年も暮れ、また春がきました。4、5人の村の男衆が伊勢参りに出かけ、伊勢の宿につき、宿帳をつける時、宿の人が

「去年は黒沢から「おかや」という女の人が一人で伊勢参りにこられましたよ。」と言いました。男達は、びっくりしてしまいました。なぜなら黒沢には、「おかや」という女の人はいないからです。「去年の春といえは、かやのみが不思議なことに、何ヶ月も葉に色をつけなかったではないか。そうするとその女というのは、かやのみが、おかやという女に姿を変えて、伊勢様にお参りに来たのではないか。」と男達は考えました。

それから数年後、かやのみの木のそばの家が火事になりましたが、すぐそばにあった、かやのみの木は焼けずにすんだそうです。その時から、村の人々は「きっと、伊勢参りに行ってきたおかげだ。」というようになりました。

いまでも、黒沢集落のはずれに大きな「かやのみの木」が、立派に立っております。

黒沢集落にはイギリスの冒険家イザベラバードも通ったと言われている。黒沢峠があります。

そしてその峠に関するこんな話も聞くことができました。

ざとこぼし

黒沢峠は、昔から米沢と越後とを結ぶ13峠の1つに数えられ、重要な交通路とされていました。この峠には約1キロメートル程度ですが、とても悪い道でありました。ある時、殿様がこの峠を見廻りに来るというので、村の人々は「こんな道を殿様に見せてはならない。」

と思い、村人総出で峠の悪い道に石を敷き並べました。5日間もかかったといいます。そのため殿様は快く通ることができました。その後、付近の人はこの石を持ち出して炭焼きのかまなどに使用したりしました。それで現在では残っているものも数が少なく、わずかに残った石も長い歳月のうちに中央がくぼんだ石になっています。またこの峠には大変急な曲がりがあり、そこで昔、目の不自由な人が山道を歩いていた時に、大きな曲がりがある事に気が付かず、まっすぐに歩いていった為、目の前の急な崖にころげ落ち死んでしまいました。それを知った集落の人達は、その崖の事を、「ざとこぼし（座頭ころび）」と呼ぶようになりました。

また、黒沢峠の近くにある峠には次のような話がありました。

子持峠

昔々のこと、物乞いが小国へ越えようとして峠を歩いておりました。頂上附近にさしかかった時、一人の乞食が急に産気づきました。あいにく山の上です。難はあったものとうとう物乞いは頂上附近にある太さ2メートル程の木の根本に無事子どもを産みました。その時からこの峠を子持峠と呼ばれるようになりました。また、この登り口のところに大きな松の木が2本あり、夫婦のように寄り添って立っているところから夫婦松といわれ、赤ん坊の夜泣きなどで困った時はその松を燃やしてその煙にあてると泣かなくなるということです。

沼沢の国蔵様

現在の沼沢の奥に「沼の平」という所があります。ある日この沼の平に国蔵様が自分の住む所を探すため、下から登って来ました。そしてあっち、こっちと住む所を選定していると、山に来ていた一人の村人と偶然に出会いました。いろいろと話をしているうちに村人は

「こんな山奥に住んでも、人々は来ませんよ、それよりすぐそこの川をもう少し下るとなかなかよい場所がありますよ。」と教えました。そういわれた国蔵様は

「なるほど。そうだなあ人のいないところに住んでも仕方がないからなあ」と一人ごとをいながら川を下ることにしました。そして沼の平の石舟に乗って間瀬川を下り現在の沼沢集落付近まで美しい景色を眺めながら下って行くと小高い山が目につりました。国蔵様は

「おお、これはきれいな所だ、あの山に登って下を見たらきっと、美しいにちがいない。」といながら石舟を岸につけ、綱を木に結うと、さっそく山に登りました。

「これは何と美しいのだろう。」と頂上で景色にみとれて、つい一泊してしまいました。するとどうしたのか今まで一点の雲もなく晴れわたっていた空が急に暗くなり始めました。国蔵様は

「これは大変だ、きっと大雨になるにちがいない。」と言いながら山をおりようとしていると、急に滝のような雨が降り始めました。国蔵様はずぶ濡れになりながらも近くの大きな木の下に雨宿りをして雨が止むのを待ちました。雨が止んだので目的の場所に早く着こうと思い、急いで山をおり先ほどの所に来てみると岸につけたはずの石舟がありません。あわててそこら辺を探したのですがいっこうに見つかりません。というのも先ほどの雨で、川に水が旧に増水し、綱がはずれ石舟は下流の方に流されてしまったのです。その事に気づいた国蔵様は

「うーむ、これは困ったことになったぞ、舟が流されてしまっは、目的地に行けなくなってしまう。」

「だんだん日は暮れてくるし、今晚はあの山の木の下に泊まることにしよう。」

とこの晩は雨宿りをしたところに野宿をすることにしました。そして一晩夜つゆをしのぎながらも過ごしました。

さて次の朝、国蔵様は昨日登った山に再び登ってみました。すると驚いたことに、昨日眺めた風景にも増して美しい山や村を見ることができました。

「これはこれは何と美しいことか。」とすっかりその美しさに感心してしまいました。

「えーい、これから歩いて行くのはめんどろ、この美しい景色をいつまでも見られるこの山の頂上に社を建てて住むことにしよう。」と社を建て住みついたのが、現在の沼沢地区の国蔵様であるといわれています。またこの時大雨で流された石舟は、あっちにぶつかり、こっちにぶつかりして流されていくうちに、だんだん壊れてしまいましたが、現在の「登りと」（のぼと）という所の川の淵に流されて来たのだといわれています。というのも、今もこの「登りと」の付近には、国蔵様が使ったものと思われる石舟に似た形の石があるのだそうです。そしてこの石にいたずらをして石をぶついたりすると雨を呼ぶと伝えられているそうです。

そしてこの話には、別の話も存在しました。

沼沢の国蔵様 その2

沼の平から国蔵様が石舟で間瀬川を下っていき、その途中で景色の良い、住みよい所があったら社を建てるつもりでした。そして石舟で下っていき「登り」という所に来ると、国蔵様の乗った石舟が突然ひっくりかえってしまいました。川を泳いで命からがら岸に着いた国蔵様は

「さてどうしょう。」

と一人で考えこんでいると、向うから牛を引いた一人の村人がやってきました。その人は、かみこんでいる国蔵様を不思議に思い

「どうかなさいましたか。」とたずねました。

国蔵様が今までの出来事を話して聞かせると村人は

「それはさぞ、お困りのことでしょう。私が良い場所を知っております。どうですか、一緒に行ってみませんか。」といいました。国蔵様は村人の好意に感謝し、

「それはれはありがたい。」

さっそく村人がつれてきた牛の背に乗せてもらい下っていきました。そしていろいろな身の上話しをしながら歩いていくと、国蔵様は案内された場所を大変お気に召し、そこに国蔵様は永住するつもりで「社」を建てました。

これが現在の沼沢の国蔵様が奉られているところであるといわれています。

坂の由来

昔、正平のころ楠公（楠正儀といわれているが家来か血縁の者だったらしい）が騎馬で沼沢の桜峠を越え、叶水の市野々集落に入ろうとして、ちょっとした平地に馬を止め鎧をはずして一休みして集落を見渡していました。

（この鎧をはずして休んだ坂が現在の鎧坂と言われています。）

ところが北西方向に不動様のお姿が、ありありと現われ、間もなくして消え失せてしまいました。見えた方向に近づいてみるとそこには滝が流れていました。

「ああ ありがたいあの滝は「辰己」の向いにかかる珍しい滝だ。不動の滝にまちがいない。」

楠公は集落に入りその飛泉寺におちついて一生を終りました。

飛泉寺の前庭の入口に、大きなイチョウの木が昔を語る様に威風堂々と立っていたそうです。

当時は、庭の東南の隅に大石を積み重ねた上に墓があり、その段に登って、遊ぶと足にまめができるといわれていました。それで、子ども達は絶対遊ばなかったそうです。

楠公の遺物は、菊水の紋章入りの物で、大切にされていましたが、その住職が越後の寺に移る際、持ち去り、残った物も大正二年の大火で寺が焼け失せました。

（平成20年度のレポート「市野々・下叶水の民俗文化について」で触れましたが）その場所は現在、横川ダムの水底になってしまった村ですが、そのイチョウの木は保存しようということで、当初ダムの建設計画で水底に沈んでしまう位置にあったその木を大工事により移動させ、現在はそのイチョウの木を中心とする立派な公園が出来ています。

ふまずの塚

傑堂尚和の修業法は一風変わった方法でした。その方法は、自分が偉いと思った和尚について回りその中で自分を磨くという傑堂和尚独特の修業方法でした。ですから傑堂和尚の師というべき人は、何人もいました。

ある時、傑堂和尚が最近お世話になっていた米沢の瑞雪院〔現 米沢市上郷浅川瑞雪院〕の住職が亡くなったので、お参りに行って帰る途中、悪い病気にかかり自分が建てた市野々にある飛泉寺に立寄りこの寺で最期をとげました。傑堂和尚の遺体は、村上の耕雲寺には帰らず飛泉寺に埋葬されました。また傑堂和尚の位牌は瑞雪寺に今でも奉られてあるそうです。

そして傑堂和尚の墓は今でも「ふまずの塚」として、踏んだり蹴ったりすると悪い事がおきるといわれています。

こちらの飛泉寺についても平成20年度のレポートで報告したとおりですが、当時の市野々では傑堂和尚の五百年祭をして、霊を弔ったとされていたことが新たにわかりました。

現在は村の人たちがダム建築に伴って新しく住まれている地区に移動され、新しい飛泉寺が建築されています。

学校からも近いということで全員で行ってみることにしました。



今回の昔物語収集では神社や仏閣に関する事柄が多く聞くことができました。

昔の人はそれだけ寺や神社が身近に存在し関わりがある生活をしていただのではないかと考えました。自然に密着している生活をしているが為に災害や事故、怪我と言った災いも今以上に多く、その為に信仰という生活を営む上でのよりどころが必要であったことを知りました。しかし寺や神社という大掛かりな建築物は建てることができなかつた山深い集落では、特徴ある石や木などといった身近にある自然のものを奉っていました。そんな自然と向き合う当時の村人たちの思いは、緑と共存する（怖い存在でもあり恩恵ももたらしてくれることを知っている）という、今の小国町の精神をも、かたち作っているのではないかと思います。

今年国際森林年になっているそうです。またそれに加え地球温暖化や節電対策などと、近年にわかに小国町の森林が脚光を浴びてきました。小国町では今年11月に森林年にちなんだフォーラムも開催予定されています。言い伝えに出てくる深いかかわりがある小国の自然、そんな町の大部分を占める「森林」に関して、次に調べてみることにしました。

(3) 木地師について

① 小国の木地業

私たちの住む小国町の面積は、東京23区に比べ少し大きい程度ですが、その土地の9割以上を森林が占めています。町の中心部以外は主に山林地帯で、水が澄み切っていて豊富なこともあり、田んぼや畑なども多数ありますが、土地の起伏がはげしいということもあり実は稲作には多くの地域は適していません。そこで、昔の人はこんなに広大な土地に存在する森林という資源を生活に活用していたのではないかと考えました。

それは冬の雪の白さと夏のブナの木の木肌の白さを表して小国町では「白い森」と呼んでいます。森林は広葉樹で特にブナやナラといった樹木が多く存在します。このことを手がかりに小国町横川ダムある交流センター「きてくろ館」（地元方言で「来て下さい」の意味）に見学に行きました。そこには昔の生活、農作業の様子の写真などが展示され、そこで木地師という方の存在を知りました。

しかし説明には「現在は小国町の木地師の文化は途絶えた」とだけあり、それ以上詳しい説明はありませんでした。そこで、この木地師という文化を調べてみることにしました。

i 木地師とは

学校の図書館を利用して調べました。

- ・ 椀や盆、膳、へら、杓子などの生活用品の素地を作り出す職人さん。
- ・ 材料の木材が不足すると集団で山を渡り歩き移住していた。
- ・ 木地小屋という場所に身を置き、生活をして木地師業を営んでいた。
- ・ 木地師が挽いた木地は塗師によって漆が塗られ、さらに蒔絵師によって表面に絵が描かれて漆器が完成する。
- ・ 江戸時代の大飢饉以後は食を求めて山を降りる木地師が増えた。
- ・ 木地師の祖先は近江国（滋賀県）小椋姓発祥とされ、小野宮惟喬親王を祖先とする「小椋氏」を名乗る方が多い。 などの事がわかりました。また、
- ・ 「嘉永年間に信州よりきたのが小椋銀右衛門（当主銀右衛門）・同安太郎（当主栄）・同徳次郎（孝一）の3氏で、はじめく口黒に入居した」 小国町史より

以上のことから次に「小椋さん」を手がかりに調べることにしました。

ii 小椋さんを探す

小国町の電話帳から小椋さんを探しました。数件あったもののいずれも住所は山沿いの方ではなく町に近い場所で、やはり今は木地師業はされていないと思いました。どの方に電話をしたらよいか相談したところ、担当の先生に学校の事務をされている方の知り合いに小椋さんがいるということを伺いました。そこでその方へ連絡を取り、後日ご自宅に伺いました。

iii 小椋郁夫さん宅訪問

小椋郁夫さん宅に伺いお話しをお聞きしました。



小椋郁夫さんは正真正銘の木地師の家系であったそうです。しかし今は木地業はしていませんでした。郁夫さんが小さいころには確かに木を荒削りした、お椀の形がわかる原型のようなものが重ねられていてそれを小屋で見た記憶があるということでした。木を切り抜く際に使った先の曲がった鉋（ノミとも言っていました）もあり、それをろくろを利用して作っていたそうです。ろくろを回す為の紐は、今考えると藤の木の皮を使っていたのではなかったかと考えているそうです。なぜなら稲縄や植物の蔓では、水に弱かったり耐久性がないからという理由からでした。

もともと本家は大石沢の赤沢集落にあったそうで、当時は生活用品など物資を購入する際は、小国町ではなく九才峠を通り、飯豊町中津川（隣の町）まで足を運んでいたということでした。

九才峠とは、小国町と飯豊町を結ぶ峠で今は舗装されていますが、所々車がすれ違えない細い道もあり、大雨や降雪期になると手前でゲートが閉められてしまう道です。よって現在はあまり利用する人は少ない峠です。一方、小国中心部を通る越後13峠街道は新潟～小国～米沢を結ぶ道です。現在の国道113号線がその街道に沿っていることを考えると、なぜ当時から主要街道であった道を使わず九才峠なのかという疑問が残ります。なにしろ小国町史にも「信州よりきたのが・・・」とあり、小椋さんの先祖の方が山を歩き大石沢に良質の木材を求め移動してきた際も、滋賀県からいずれかのルートを経て、九才峠（福島側から）を通ってきた可能性があるのではないかと話になりました。

郁夫さんは、現在木地業からは離れてしまいましたが、いまでも木工芸品に関心があり、お持ちの籠や笠、アケビの蔓やブドウの皮で編んだかばんなど多数見せて頂くことができました。



小椋郁夫さんの家は分家にあたるそうで、本家にあたる小椋成一さんという方を紹介していただくことになりました。

iv 小椋成一さん宅訪問

小椋成一さん宅に伺いお話しをお聞きしました。



小椋成一さんは、木地師として小国に来た、小椋銀右衛門氏から数えて7代目にあたる方で、成一さんの祖父までは銀右衛門の名前を5代に渡り世襲していました。福島の会津から山を越え大石沢の口黒（赤沢より半里という記載がありました）へ来て木地小屋に住み、そこから赤沢に一度移り、成一さんの代から幸町に住んでいるそうです。

しかし、やはり今は木地師業はやられておらず、小国の企業に勤められ数年前に退職されたということでした。成一さんが幼少のころ祖父にあたる5代目銀右衛門氏が小屋でナラやブナの木から作っていたお椀を見ていたそうで、祖父が亡くなった後もたくさんあったらしいのですが、今の家を建てる際すべて処分してしまったということでした。作られたお椀は自宅で使っていた他に売り物にしていました。しかしその際の取引相手や金額などは詳しい史料がないためにわかりませんでした。馬や牛は飼っていなかったことから手作業で木を運んでいたのではないかと疑問が湧きました。また質問にあった樹木の採取場所なども残念ながらわかりませんでした。

成一さんが所有する史料を拝見させていただきました。

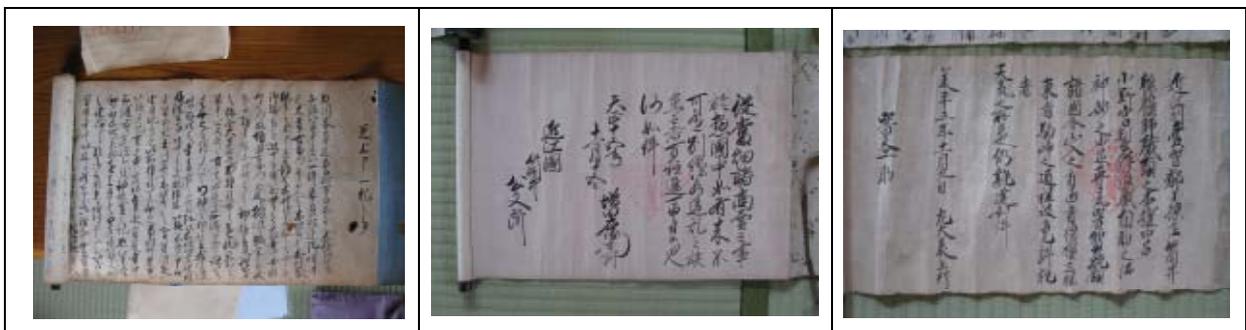
小椋成一さん宅所蔵 文書目録

年代	表題	内容	差出 作成	受取
永久 2年	御縁起	木地業縁起	大蔵卿雅仲ほか	
承平 5年	承平5年 綸旨	朱雀天皇綸旨 文書の移し	左大承	器空助
元平 3年	近江国筒井 職頭之事	正親町天皇綸旨 文書の移し	左大弁	小野宮社務
天正11年	丹羽五郎 左衛門免状	丹羽五郎左衛門免状文書の写し	丹羽五郎左衛門	
天正15年	増田右衛門 免状	増田右衛門免状文書の写し	増田右衛門	筒井公文所
文化 4年	差上申一札 之事	木地史支配所間の勢力争いに対する江戸寺社奉行裁許への請状	白川家家来ほか	寺社奉行
文政10年	往来手形	木地師銀右衛門二付	筒井公文所	関所役人衆中
安政 4年	心得	木地師個心得	筒井公文所	

（小椋成一さんが所有する目録リスト）より



小椋成一さんから数点の古文書の説明をしていただきました。木地師とは許可制で木地にかかわる材料に適している木と判断すれば「どこの木でも切り取って良い。」という特権が与えられその許可証があることがわかりました。特に比較的新しい史料である「往来手形」でも、文政10年（1827年）およそ200年も前の物で、古いものともなると永久2年（1114年）およそ900年も前の物であることを聞き「どうぞ」と言われ、手にとってはみましたが、歴史を感じる貴重な物にとっても緊張しました。



木地師の身分を保証し職業の繁栄に尽くした「筒井公文所」の文字が読み取れました。（中央）

近江国愛知郡小椋庄に住む木地師一門を本家とし、地方の木地師すべてを分家とし、大皇器地祖神社か筒井神社のどちらかに氏子として所属しているそうで筒井公文所の文字から小椋成一さんは筒井神社の氏子であることがわかりました。

最後に、小椋成一さんは、木地師の仕事は木を切って加工するだけではなく、山の環境を整えることも仕事であった。ということをおっしゃっていました。それは、木の伐採という行為は伸びすぎた木や枝や草を切ることによって、これから成長する木々など広く自然の森の調和を守る役割もあったという意味だと思います。木地師たちは小国町の森林を代々守ってきてくれたことで、今の小国が存在する。それはとても感謝しなければならないことだと感じました。



古文書を前に小椋成一さんと一緒に記念撮影。

v 2人の小椋さん宅を訪問して

私たちの小国高校では学年行事として所有する学校林での下刈り作業というものを行っています。それはどんなものかといいますと、以前、本校には林業科というものがあり林業に関する授業が行われていました。実習では山にある宿舎で共に寝泊りし、実習林で植林から伐採までを学んでいたそうです。今は林業科はありませんが、当時の思いを伝統として残すために行事として下刈り作業をしているのだそうです。毎年1年生が徒歩で当時の実習林に出向き1日ばかりで下刈り（まっすぐでより太い木々にするために下枝を刈り払い、良質の材木として成長させる手助けをすること。）に従事します。マムシや蜂、ウルシの木などもあり注意が必要な為、はじめは嫌がる生徒たちもいるのですが、やり終えた後はみんな充実感から笑顔になれ、岐路はとても話しが盛り上がる行事です。そんな私たちのやっている作業も、木地師の方と思いは通じる部分があることを知りました。

vi 木地師の足跡をたどる

初代小椋銀右衛門氏は福島県会津から来たことがわかったことで、越後から来た木地師だけではないことがわかりました。福島県会津若松市は漆で塗る会津塗りが有名です。

「木地師が挽いた木地は塗り師によって漆が塗られ、さらに蒔絵師によって表面に絵が描かれて漆器が完成する。」

塗り師（塗部）がいるということは、木地師も存在するはずです。

「木地師の祖先は近江国（滋賀県）小椋姓発祥とされ、小野宮惟喬親王を祖先とする「小椋氏」を名乗る方が多い。」

滋賀県が発祥ということからどのような道で小国町へやってきたのかを次に調べました。

- ・近江国（滋賀県）東近江市君ヶ畑が木地師発祥の地と呼ばれている。
- ・1100年以上前、惟喬親王（これたかしんのう）がこの地に隠棲した際、巻物の紐をヒントを得て考えついたといわれる「ろくろ」を活用し、木地を加工する技術を編み出し、この地の人々に教えた。（55代惟喬親王は文得天皇の第一皇子だったにもかかわらず、母親の身分が低く、皇位を継ぐことができず、ここに隠れ住んだ）
- ・江戸時代には日野職人（近江職人）は滋賀県から、関東その他まで拡大した。

ことがわかりました。しかし東北へのルートは違っていました。

- ・江戸時代、近江領主の蒲生氏郷は徳川幕府によって会津に封じられ、この時に近江から木地師を呼んだ。（近江の国 木地師のふるさと）より

このことから、蒲生氏郷によって招かれた近江の木地師がきっかけで東北地方の木地業が各地に広がったことがわかりました。蒲生氏郷は当時の黒川を若松と改めるなど、今の会津若松の基礎を築いた人でもあります。

次に福島県の木地を調べることにしました。しかし学校には福島の木地に関する本が無かったため「苗字」に関する本から探してみました。すると、

会津地方に「小椋」姓が多く福島県内では、62位の多姓である。（東北人の苗字）より

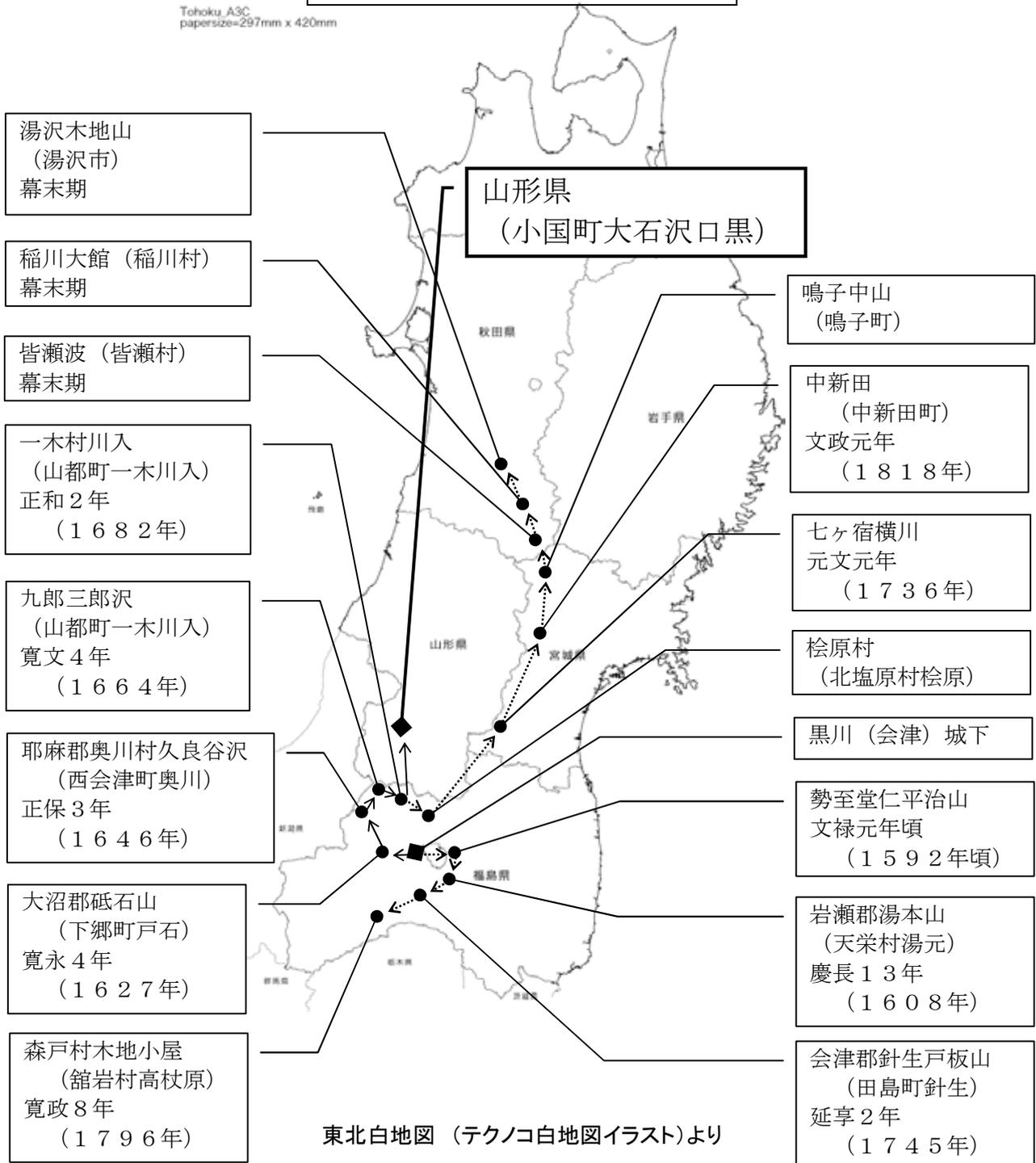
小椋姓を持つ木地師の東北各地への広がりがわかりました。

- 1 会津城下（黒川）～岩瀬湯元～会津針生（はりう）～会津森戸（もりと）に至った一派
- 2 会津城下（黒川）～大沼郡砥石山～耶麻郡奥川村～九郎三郎沢
～一木村川入（いちのきむら）～桧原村 に至った一派

表にまとめてみました。

東北の木地師（小椋 姓）の移動経路

Tohoku_A3C
papersize=297mm x 420mm

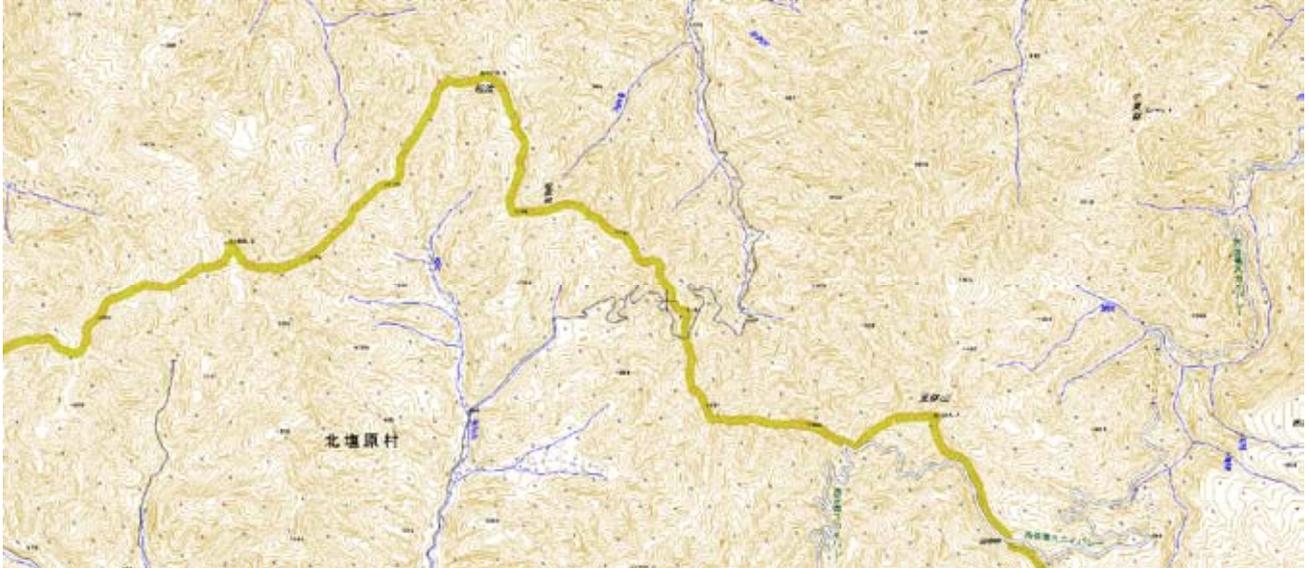


東北白地図 (テクノコ白地図イラスト)より

山形県と福島県との県境には国内の100名山にも名が載る飯豊山があります。その飯豊山のすそのは大きく新潟県を含め3県をまたいでいます。木地師達は福島の地から良質の木々を求め山に入り、一方は新潟にそして一方は山形に下り、後に小国町にたどり着いたのかも知れません。当時3名の木地師が小国に入った、そのうちの少なくとも1人は福島側から入ったことがわかりました。そしてその移動経路を当時の道から辿ってみました。

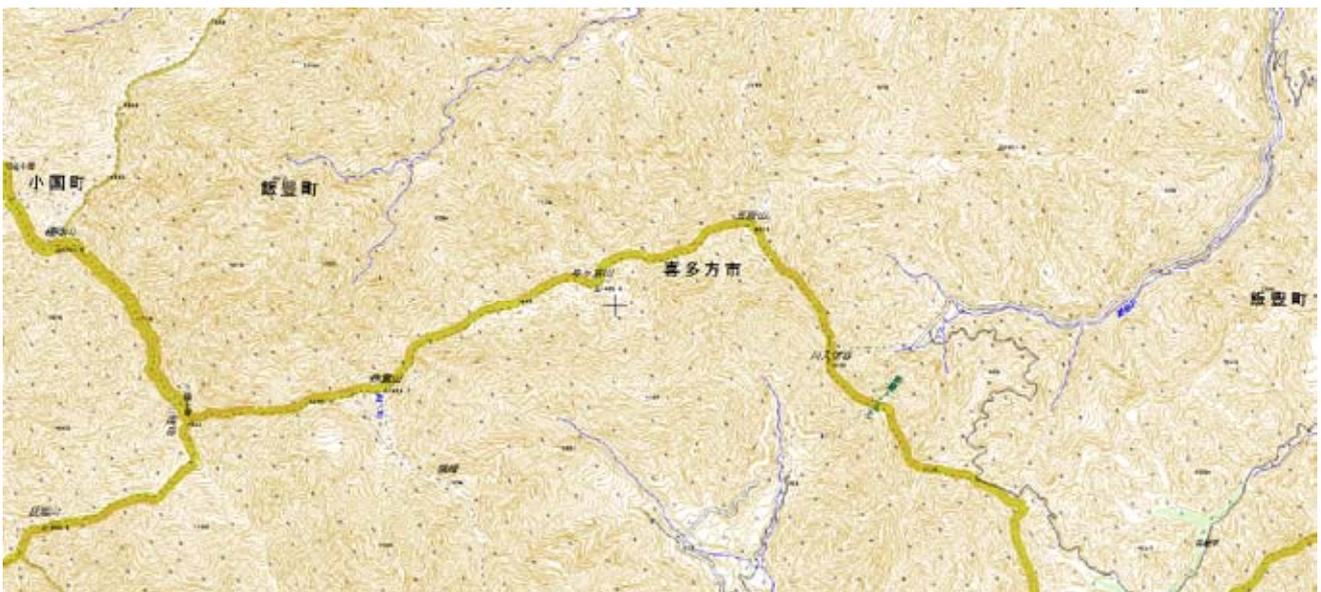
地図（国土地理院発行 2万5千分の1地形図）より

・喜多方→米沢街道→米沢綱木→川西町玉庭→飯豊町中津川→九才峠→小国



と考えたのですが、わざわざ小国に来るために米沢（盆地である城下町）を経由していく明確な理由がわからず調べていくうちに福島から飯豊に通じるルートがあることを知りました。

・喜多方→※谷地峠→飯豊町上屋地→九才峠→小国 ※谷地峠（現地の方が呼んでいる名前）



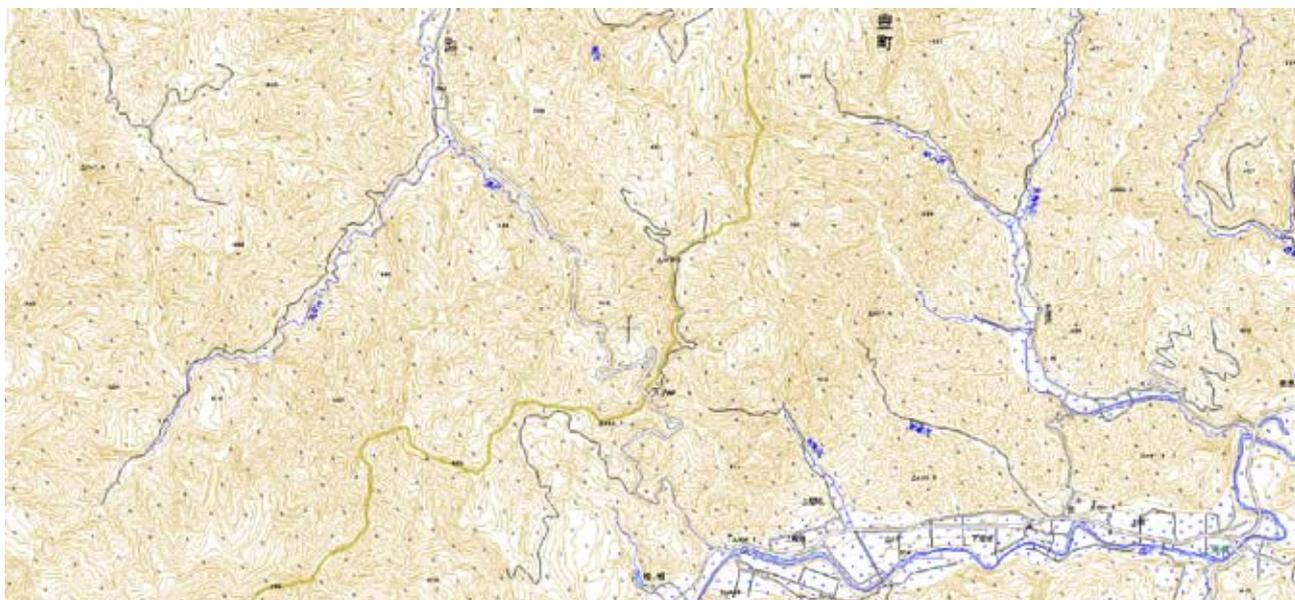
飯豊町上屋地までの途中には飯豊山への登山道があり、それは飯豊町から飯豊山へ登る唯一の登山道でもあります。山に精通している人はこの道を通るといわれていることなどから、米沢に入らず、山沿いに福島から飯豊町に抜けるこのルートを使った可能性もある事がわかりました。

次に大石沢に住む人にとって関連の深い峠道を調べてみました。

大石沢に関連の深い峠

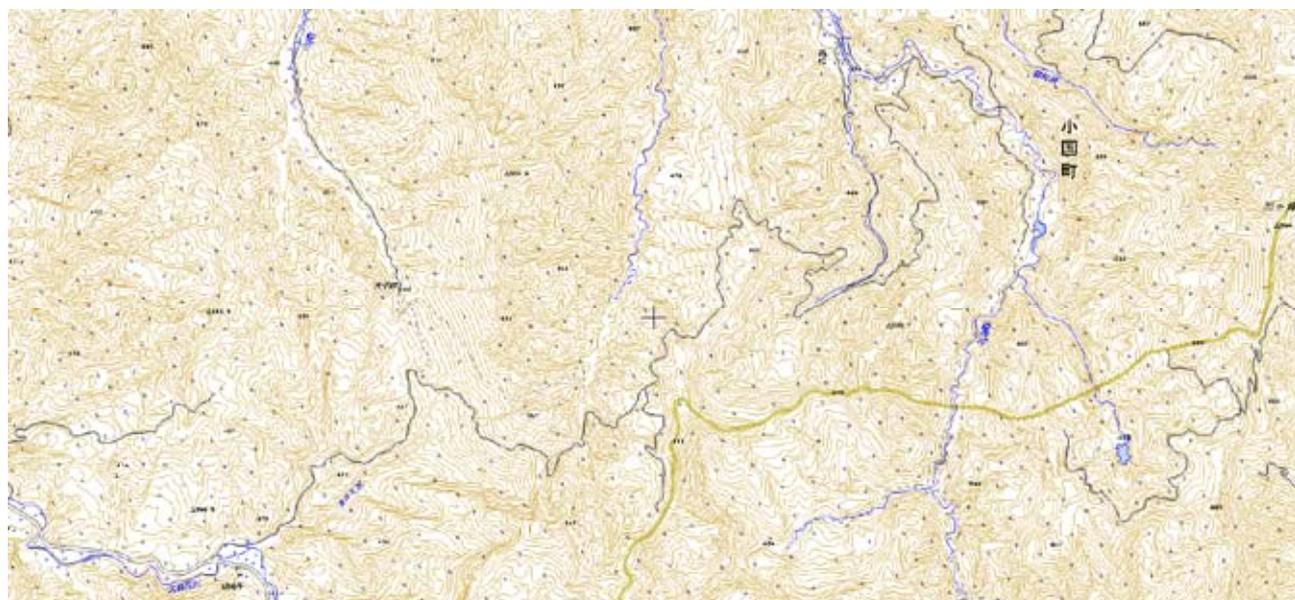
峠の名前	結ぶ地区	用途
九才峠（くさい）	小国町大石沢 ～ 飯豊町上屋地	・生活物資の輸送等 ・初代小椋銀右衛門氏が通った道
大平峠（おおひら）	小国町大石沢 ～ 小国町沼沢	・生鮮魚類（ニシンや数の子）の輸送 ・診療所への往診
谷地峠（やち）	福島県喜多方市 ～ 山形県飯豊町上屋地	・飯豊町から福島県への移動 ・初代小椋銀右衛門氏が通ったのではないかと考えた道

九才峠 地図（国土地理院発行 2万5千分の1地形図）より
当時生活する上でかかせない峠でありました。生活物資は主に飯豊町中津川で調達していた。



大平峠

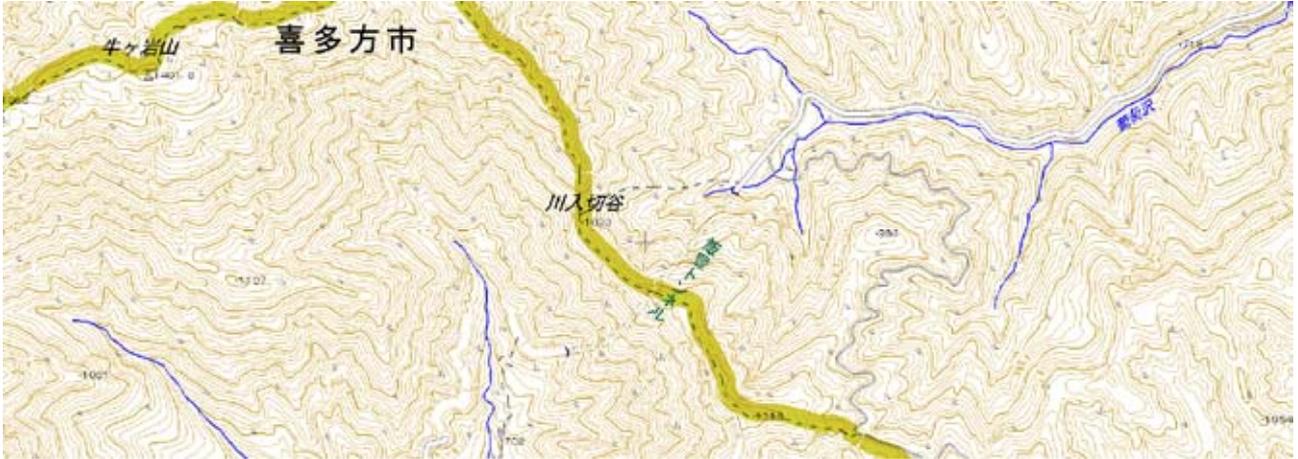
飯豊町は内陸部で新鮮な魚介類（にしんや数の子）は入荷しにくい為、新潟との往来がある越後13峠街道沿いにある沼沢へ行っていたということです。その際に利用していた峠です。



谷地峠

決まった名前はなく「谷地峠」とは地元の人が使っている名称です。途中山道が切れていますが当時は繋がっていたということです。

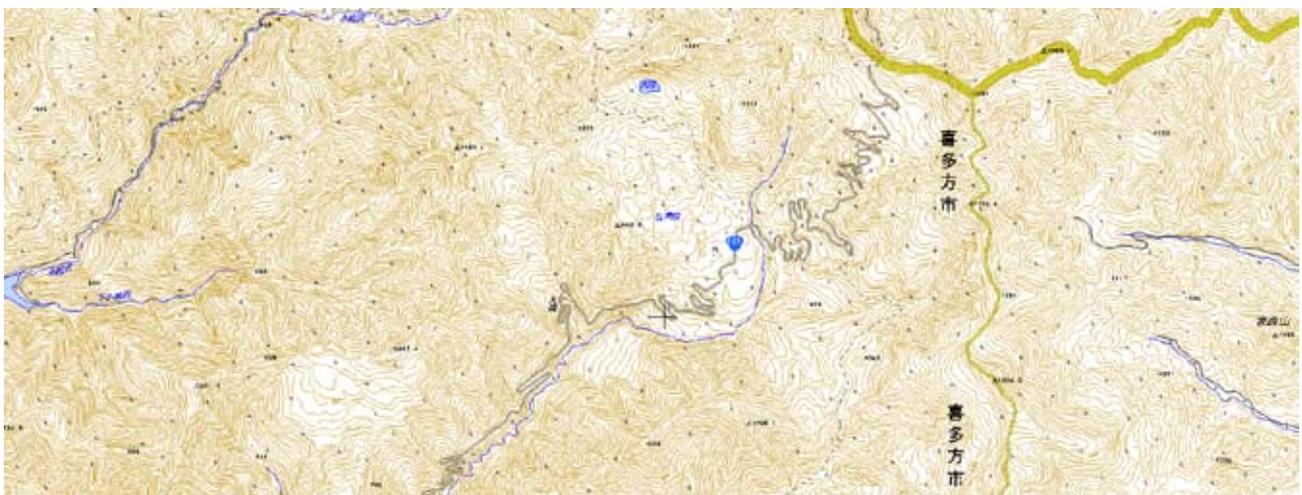
谷地峠の南側には飯豊トンネルがありますが、これは大規模林道としての計画があった当時、別の場所の工事が自然保護区で中止になったことを受けこの道も工事が中断しています。トンネルの先の道は寸断され、今も手前で通行止めになっています。



現地の写真



福島から飯豊へ抜ける道が谷地峠ならば、米沢へ抜ける道は大峠があります。（旧大峠は稜線を巻き、谷を避ける九十九折でしたが今は新しい国道121号線として別ルートで米沢に繋がっています。地図では、福島側の入りくんだ道から急斜面であることがわかります。）



喜多方より来てこの大峠を通り米沢に入ったところに田沢があります。ちょうど山の反対面にあたる場所で、同じように山林が広がりそこでは当時木流しの文化があったことがわかりました。

② 木流しの文化

i 田沢の木流し

- ・ 田沢で伐採された木は、小樽川から鬼面川へ、そして、上杉城下（米沢市）の木場川へと流した。その陸に上げていた終着の場所から現在の木場町は名がついた。
- ・ 田沢地区は、米沢藩の中でも日光街道杉並木の植樹補植の経験があったことで、杉林の山林や林業技術でもすぐれた面をもっていた。
- ・ 慶長年代から昭和10年代まで続いた。
- ・ 木には印を付け個人を判断して、木の長さは地区ごとに決まっていた。
- ・ 主に冬の作業であった木流しは、春先の雪どけ水の中へ飛び込む為、かなりの寒さと危険が伴う重労働だった。 （米沢市史）より

雪が積もっている冬でも行う理由は、倒木の際、雪が衝撃を吸収し木を傷つける事がない事と、木を川まで輸送する際そりを使い、夏には蛇行する山岳道ではない直線に雪道を進むことができるからということでした。田沢は山沿いでも盆地の裾の部分で田畑に利用する平坦な部分が多くあります（現在の田沢地区はその平坦をいかし、冬はクロスカントリーの県大会などのコースにも活用されています）。そりを使うという陸の輸送は当時の知恵だったといえます。

ii 木流しを通しての習慣

- ・ 藩内の各地にある山村に出かけて集団で山仕事にあっていた。
- ・ 木流しする者にとって秩序と信頼は絶対であり、集落ぐるみの共同体の中では「流木連」や「講」が生まれ、信仰を通して連帯意識を強めていた。
- ・ 木流しに参加し山仕事で一人前の働きが出来ることが、集落での大人扱いを受けるしきりであった。 （米沢城下を支えた人々）より

重機の無かった時代、木を輸送する手段は限られていました。そこで人手を多くすることで補っていたことになります。限られた期間での作業はより効率をあげるために明確な役割分担が決められていたと思います。危険な仕事であるが故に約束事も厳格に決め、集団としてまとまっていく必要がありました。仲間との結びつきを強くして結束を強めていくことは、安全に仕事を進める上で絶対の条件です。仲間を信用し信頼を得ることは大人としての責任感を養う場でもあったと思いました。夏は田畑作業に従事し冬にしか伐採しないということは、夏はしっかり成長させる期間として自然形態の一年のサイクルを崩さないような思いやりがあったように思いました。また、田沢にはかやぶきの屋根を持つような大きな家が多く点在します。家を建てる際、木が豊富な地区の人は良材をふんだんに使用することで地区に住むものとしての誇りを保っていたのではないかとも思いました。

③ 木々への思い

山仕事と木流しは山間部の人の暮らしには欠かせないものでありました。

そんな生活の基盤となる樹木に対し感謝する気持ちも強かったのではないかと思います。調べていくと、置賜には木に関して当時の人の気持ちが伺えるような石碑が存在することを知りました。

それは草木塔（そうもくとう）と呼ばれるものです。

草木塔、または草木供養塔と刻まれた石碑は置賜地方に約60基ほどあります。

置賜地方以外では県内に8基、福島県に1基、最近のものが東京に4基みられるだけという珍しい石碑です。

広報よねざわより

江戸期の草木塔は34基でそのうち32基が置賜地方にあるといわれています。

最古のものは米沢市田沢の塩地平にある草木供養塔で1780年（安永9年）に建立されました。

草木の里 田沢より

田沢地区は、藩政時代には、「おんばやし御林」と呼ばれ、米沢藩の御料林のあった所です。この地の林は、お城や御殿、神社仏閣の用材や城下の用材として切り出されてきました。また、安永9年4月17日に、現在の米沢市桐町・銅屋町・立町など、千余戸焼失の大火があり、その時に、藩主の命令でこの「御林」から、多くの用材が伐採され運び出され大火復興にあてられました。

しかしこの草木塔は建てた明確な目的はまだ解明されていません。学術的にもさまざまな説があるようです。大きく3項目に分けてみました

・草木にもそれぞれ靈魂がやどり、その草木から得られる恩恵に感謝し、伐り倒した草木の魂を供養する心が、草木塔を建てさせたというもの。（供養説）
・飯豊山のお山信仰と共に、雪崩や土砂崩れなどの災害にあわぬよう。さらに危険な山仕事から命が守られるようにと願うもの（安全祈願説）
・植林した木の成長と山野の山林資源の豊かさ、後々まで資源が枯渇しないよう願った。というもの（樹木の養生祈願説）

どれも山や木への思いが詰まっている説です。明確には判断できなくても木の重要さを知っていた当時の背景を考えると、従事している人にはこのすべての思いが込めている感じがしました。

置賜地区にある草木塔は米沢市の田沢・築沢・赤芝・綱木・万世、高島町の上和田、南陽市の萩、白鷹町の小四王、川西町の玉庭地区・時田・上小松・犬川・西大塚、飯豊町の中津川などに存在しますが小国にはありません。しかし飯豊町の中津川にあるものは小国町との境界である九才峠の小国町大字大石沢の区域に入る箇所です。建てられた年代をみると田沢地区から川西町玉庭地区、飯豊町中津川地区へと広がっていった事がわかり、また、この3地区は山仕事に関して技術交流があったと伝えられている事。などから交流と同時に草木塔が伝播していったのではないかと考えました。

木地師が直接関係していたかという所までは調べられませんでした。草木塔が九才峠にあるということは、その草木塔という存在そのものが中津川と交流があった小国町大沢地区に住む木地師にとっても、共通の思いがあったのではないかと考えていいのではないかと思います。

④ 木地業のいま

i 現代の木地師の大変さ

木地師が少なくなってきたとお聞きしたことで木地業を取り巻く環境を次に調べてみました。すると木地師業は今大変な苦境に立たされている事がわかりました。後継者などの人材不足の他に、木の加工品そのものの衰退という問題があげられています。安価な大量生産向きの、例えばプラスチック製品などへと生活器具が変化している事も理由の一つです。自分達の使う日用品で身近なものを考えた場合、買い替えのほうが実は安く上がる。というようなことがよくあります。自分は物を大切にする気持ちを持っていると思う一方、日常的に使うものだからこそ新しいものに買い換えたいという気持ちもあります。物があふれている今の時代はどうしても新しく安いものに目がいってしまいがちです。そんな、木で作られている製品のぬくもりやあたたかさ、木目の美しさを忘れつつある消費者。その時代に沿った製品・デザイン・価格などアイデアを次々と考えていかなければならない生産者。とのバランスということが、伝統の技を発揮する機会を少なくしてきている要因の一つなのかもしれないと思いました。今は携帯電話用の木のストラップなども売られていますが、そんな木の加工品をみると、ふと木地業の方の苦労を考えたりするようになりました。

大変だといわれているこのような時今の時代でも木を加工する民芸品などの分野で、昔の伝統を今の技術で木地業界を牽引していらっしゃる方が必ずいるはずと考え、探したところ隣町に木地玩具を生産する会社があることがわかりました。（そこは平成22年度のレポートで触れた、小国と長井を結ぶ西山街道の長井側の下り口でした。同様に山林が広がる場所です。）

その製品では日本一の製造販売を誇る会社ということで、お話しを伺いに訪ねました。

会社までの道のり（山を迂回する形で行きます。）



ルート地図 (Google Maps ルート・乗換案内) より

ii 山形工房

長井市寺泉にある「有限会社 山形工房」に訪問しました。

(有)山形工房はNPO法人日本けん玉協会が製造指定工場に認定する世界で唯一の競技用けん玉製造販売を行なう日本一の会社です。



競技用けん玉

- ・日本けん玉協会の会長である藤原一生氏（映画 南極物語の原作者）が体を壊した際、幼い頃の「けん玉」を思い出し、それでリハビリをしました。その時の経験から全国にけん玉を普及させようとなりました。
- ・日本国内のけん玉競技人口は約300万人と言われ、海外では15～18ヶ国の国々の人々に愛用され、子どもからお年寄りまで使用出来ることを前提に作られました。
- ・そんな「けん玉」の技は約3万種もあり、技を競う大会は地方大会から全国大会まで幅広く実施され、最近では文部科学大臣杯なども開催されているそうです。

有限会社山形工房の歴史

1973年10月	山形博進社創業。木地玩具・民芸品製造
1977年 3月	競技用けん玉「富士」製造開始
1978年11月	世界初・日本けん玉協会指定工場に選ばれる
1990年12月	競技用けん玉生産「日本一」に認定される
1992年10月	新工場設立。生産体制を強化する
1992年11月	会社成立「有限会社 博進社」
2004年12月	日本けん玉協会会長より新認定けん玉製造指定工場の認定を受ける
2005年11月	博進社より社名変更「有限会社 山形工房」
2008年 4月	競技用けん玉「大空」発売
2009年 4月	「大空」新色、ピンク、水色発売
2009年11月	大けん玉「太陽」発売

山形工房は木地玩具を製造する前身会社「山形博進社」設立当初は駒を製造していました。東京で問屋を営む鈴木與三郎さんの弟さんからけん玉製作の依頼があり「けん玉」作りが始まりました。試行錯誤の末、昭和52年に念願の第1号けん玉「富士」が完成したそうです。

・競技用けん玉の素材は「剣」と「皿」の部分はブナ。「玉」の部分はヤマザクラを使い（弾みや密着度合の違いがあるため、部分により木材を変えている）「糸」は特殊な素材でよれないものを技術研究して使用しています。

・玉の部分は1万回試し打ちして一箇所でも塗装が剥げると規格上失格となる為、塗装も特殊な材料で合成されています。

・木を切削する機械は自分たちで考えた機械を使用していて、NHK番組「ここに技あり」では工場長が出演しその腕前を披露したそうです。

工場長の鈴木良一さんに工場の見学と説明をしていただきました。



工場長の鈴木良一さんにお話しをお聞きしました。

・以前は地元の木を使っていましたが、地元の木の入手が難しくなったため（小国の地域の多くは国有林）個人の山で植林されている木を購入しています。

・競技用けん玉の規格は10分の1ミリの精度を求められるため、歪みが出ないように（水分が多い場合木が歪がみ、逆に少なすぎると木が欠ける恐れがあります。）木の水分量は14%～17%（米の水分程度）にしています。またその際、自然乾燥を行うため適した木材にするには最低3年の期間をかける。など木の管理に関しては細心を注意を払っています。

けん玉の材料

ブナ	肌目が綿密で、やや重硬ながら加工性は比較的良い
ケヤキ（欒）	重硬で加工性はやや悪いが、強靱で狂いが少ない
ヤマザクラ（山桜）	やや重硬で反りや曲がり少なく加工性が良い
イタヤカエデ（板屋楓）	やや重硬で、材面には絹のような光沢がでる。美しい縮歪や鳥眼歪が現れるものもあり工芸材料としても使用される
エンジュ（槐）	主に美術工芸品、床材に用いられる木で、日本では昔から災難よけの木として屋敷の北角に植樹した。

けん玉の製造工程

- ・原木から角材にする。
- ・角材から丸材にする
- ・玉の加工
- ・皿の加工
- ・剣の加工
- ・玉の塗装
- ・玉の穴の加工
- ・組み立て・検査



製作風景は企業秘密で写真の撮影は出来ませんでした。

見学が終わった後、実際にけん玉作りを体験させていただきました。

職人の方に切削機械操作の手ほどきを受けながら、角材から順を追って削っていきました。お手本に見せていただいた、職人の方の素早い動きでできばきと作業している姿の後だったこともあり、自分たちが行う作業はとても遅く感じられ、不器用にも思い通りに削ることができませんでした。作ったけん玉は時間がかかったわりに表面も滑らかに出来ず、とても商品の物と比べものになりませんでした。繊細で丁寧な作業を見て、職人の方の持つ技術にとても感動しました。

職人の方の技術は長い修行によって得られ、常に向上心を持ち研究をし続けているということをお聞きし納得できました。「東北の大自然が享受する「自然の恵み」そして「木の美しさ」受け継いだ伝統と現代的な技を生かし、皆様に愛される製品を作って参ります。」と話す良一さんはじめ工場で働く従業員の方々の木に関するこだわりを感じることができました。

木地師の重要な技能の一つに刃物作りがあげられますが、まさに理想の製品を理想の形にする為だけに存在する理想の刃。(椀やボウルなどを作る際、ろくろを使わない場合J型の特殊な鉋が必要。など)世に出回っていない物は自分で作る。という職人の方のゆるぎない強い情熱を感じることができました。

最後に商品のけん玉をお土産にいただきました。皆さん、お忙しい中ありがとうございました。



手作りけん玉を持って皆さんと一緒に記念撮影(写真左)・民芸品用のけん玉(写真右)

(4) 言い伝え集作成

① 製本にあたり

私たちが入学してまもなく担当の先生が「みんなの足と目と耳で集めた昔物語を綴ることは前々からの目標であった。」と言いました。聞取りをしたノートを参考に、夏の暑い日にも地道に各家庭に連絡をとり訪問するという繰り返しであるという事は話には聞いていたものの実際に行くと、とても投げ出したくなる作業でした。しかし先生が言う「班8名という大人数も小国高校の今後を考えると後は成せない。」との言葉に今まで書きとめた3年間の言い伝え収集ノートの重みを感じ、残してくれた過去のデータはとても貴重な私たちの財産なんだ。との思いが湧いてきました。そして私たちがその大詰めに立ち会わなければならないという責任を実感するようになりました。先輩方の過去のレポートという努力を貸してもらい、冊子にしようと話し合いました。

② 冊子をつくる

私たちの住む小国町を知っていただくためにどのような構成にしたらより多くの人に興味を持って読んでもらえるかを話し合いました。その結果、次のような目次で進めることにしました。

項目1 (資料) 【小国町の概要】		
①位置 新規に作成	②面積と土地 新規に作成	③人口と世帯 新規に作成
項目2 【羽前小国郷の地図】	項目3 【集落と大字名】	項目4 【集落名の由来】
平成22年度 今年度より	平成22年度より	平成22年度より
項目5 【置賜地区の方言集】	項目6 【言い伝え集】	項目7 【語り部さんの語り集】
今年度より	平成22年度より	平成21年度 平成22年度 今年度より
項目8 【昔物語集】	項目9 (付録1) 【大里峠の大蛇伝説】	項目10 (付録2) 【北部の街道】
平成21年度 平成22年度 今年度より	平成21年度より	平成22年度より

冊子冒頭に小国町の概要を載せることで、小国町はどんな地域なのかを知ってもらうことにしました。また、各年度のレポートより抜粋をして付録として挿入することにしました。

注意した点は次のとおりです。

- ・過去のレポートを読み返し、誤字や脱字を確認する。
- ・各地区に分別し、取りまとめる。
- ・雛型を作りそれに合わせて構成する。(文字の大きさ、フォント、余白など)
- ・今にそぐわない表記がされていないか確認をしながら校正をする。

調査を終えて

山々に囲まれた小国町は自然あふれる土地柄ということから昔から、そこに住む人たちは自然の厳しさを知っていましたし、1人の人間の弱さもわかっていました。そこからみんなで協力して事にあたることをなにより大切にしてきました。今年春の震災の際、大きな暴動もなく、配給の際は整然と列を組んで順番を待つそんな光景を、海外のメディアが報じていました。日本人の規律を重んじ、和を大切にするというそんな日本人の行動は、物を祀り崇める、神様というような一人ひとりの内に秘めている、目に見えない空気のそんな存在があつて形作られているのではないかと思いました。

また、そんな自然に依存する生活環境の中、家族や集落間で育まれながら言い伝えや昔物語は多く生まれたことを学びました。時代を超えて今の自分まで小国の物語が残っていることは、実は大変すばらしいことなのだと実感しました。幸いにもここ小国は難を逃れましたが、今年の震災で伝統や文化といったものがなくなるかもしれない状況を目の当たりにした今だからこそ、より強く思いました。

木地師業については、日本のものづくりの心に通じると思える、職人の方の壮絶な生き方を学ぶことができました。木地師は使用する木材や保護するウルシが深い山にしかないために、自ら率先して山に籠り生活をしていました。自分の持つ技を注ぎ込み満足のいく木地物製品を世に出すという使命感のもとで生活の不便さも省みず生涯にわたっての揺るぎない強い意志を感じました。時には命となる鉋を造るために鍛冶をして、そして時には数日間も山に入り材料となる樹木を探しにいく生活でした。木材が不足したり、納得いく木が見当たらない土地ならば、その土地は潔くあきらめ、新天地を求め山々を転々と移住する。そんな木地師にはもって生まれた職人の誇りが宿っていたように感じました。明治になり状況が変わります。地租改正事業によりそれまでのように勝手に山に入ることが出来なくなり廃業したり、転職することになってしまいました。中にはその土地に愛着を持つようになり、森林豊かな地域に定着していった木地師もいました。良い木を探すこと。つまりは良材の育つ環境の豊かな土地を見極めることが出来る、そんな山のプロである木地師が永住の地に小国を選んだ、ということは小国で生活している私たちにとって、とても誇りに感じていいことだと思います。これからも、そしていつまでも自然環境で誇れる小国町であるように私たちにできることは何かを今考えなければいけないと思いました。

反省としてあげることは、去年のレポートにもあつたのですが、レポートのしっかりした骨組みの上で役割を分担をしないいけなかったことがあげられます。（先生は1つ記事を書くに5倍・6倍の情報を得ないと信憑性に欠ける。無駄だと思えるところが実はレポートの骨を支える助骨なんだと言っていました）置賜地区の木流しや草木塔の文化は、地域では有名なこともあり文献が豊富でスムーズに進んだのですが、小国町とかけ離れていく上に聞き書きができず、ただ文献を書き写すだけになってしまう等の理由から深くは触れるつもりはありませんでした。それが男子たちは勝手に進め過ぎ、その後の活動の停滞を招いてしまいました。このことは去年の反省にもありましたが、同じことを繰り返して反省を生かすことができなかつたことはとても残念に思えました。

言い伝え集の作成では初めての冊子の編集作業だったので、本独特の単位や部分の呼び名、書式など、本をつくる際の決まりごとを学ぶことから始めました。その、決まりごとに従った上で、興味を持って読んでもらえるようにとアイデアを取り入れながら進めました。本を作るという全工程を通して、みんなで話し合っ取り組む、みんなの意見を統一していく難しさや道筋を立て役割を分担して物事を進める大切さがわかりました。ただ全頁に挿絵を施したかったのですが表紙だけにしかできなかった事が心残りでした。

最後に、長く伝承され続けた日本特有の文化は、都市化、核家族化など現代の生活様式の中で、その多くが姿を消そうとしているという実態を知りました。

今回の学習を進めていきながら、未だ暮らしの中に伝承文化が残る私たちの住むふるさとの良さを改めて見つめ直すことができました。

このようなきっかけを作っていただいた、コンテストの主催者の皆さんはじめ調査にご協力をいただいた関係者の皆さんに感謝いたしたいと思います。大変ありがとうございました。

参考

- ・ 市野々下叶水の民俗文化について 平成 20 年度小国高校レポート
- ・ 小国の昔物語について 平成 21 年度小国高校レポート
- ・ 昔物語からみる小国町 平成 22 年度小国高校レポート
- ・ やまがた民俗文化伝承誌 菊地和博 著
- ・ 小国マタギ共生の民俗学 佐藤宏之 著
- ・ 東北人の苗字 鈴木常夫 著
- ・ 山を忘れた日本人石川徹也 著
- ・ 小国郷民俗文化伝承記
- ・ 越後三面山人記 田口洋美 著
- ・ 里山 有岡利幸 著
- ・ 熊を殺すと雨が降る 遠藤ケイ 著
- ・ 民俗学の方法 井之口章次 著

地図

- ・ 東北白地図 テクノコ白地図イラスト
- ・ 地形図 国土地理院発行 2万5千分の1地形図
- ・ ルート地図 Google Maps ルート・乗換案内